特111
253

アカギ叢書

東方見聞録

作 マルコ・ポーロ

174
910

始

特111
253

帝國圖書館藏

アカギ叢書第卅四編

東方見聞錄

マルコポーロ原作

文學士 佐野保太郎編

大正
3. 9. 1
内交

アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや煩惱之を久うして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄て、直に一書肆の丁稚となつて初めて櫓を握るや、爾來悤忙の間に既に六星霜を經たり。未だ何等の得る所無きを恥づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せしめ度し』との信念に至りては、年を經て益々固きを覺ゆ。是予が菲才自ら顧みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝文にして、誠に珍重すべき內容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

る一也。内容雖濫を極めたる一也。尨大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行するに至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各册を全部金十錢にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に飜譯す。如何に尨大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。依つて以て從來專門家、篤學者のみの專有に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫の、高價、尨大、雜濫の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんとす。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

大正三年三月

赤城正藏白

序

コロンブスが新大陸を發見したのも元はジパングと云ふ蓬萊山のやうな國に行つて見たいと云ふのが、其動機の一であつたと云ふことである。そして其ジパングは取りもなほさず、この我大日本帝國である。そして其ジパングを世界に紹介したのはマルコ、ポーロの旅行記である。然らば彼の東方見聞錄は單に東方の奇事異聞を歐洲に紹介したといふだけではない、吾人日本人にとつては別して關係の深いものと云はねばならぬ。素より其記事には杜撰な所も少くないし、吾人の知れる地名人名とも發音が違つて居るから、一々これを研究するのは容易でないが、只一通り讀んだだけでも慥かに十分の面白味はある。

元來本書の本文は緒言にも記した通り、著者マルコが獄中で筆記せしめたものである。其第一の原本は何處の國語で書かれたか、是について、ラムージオ

は羅典語だと云ひ、マーズデンはゼニス語だと云ひ、バルデリ、ボニは佛語だと云つて居るなど、隨分種々の異説もあるが、いづれにしても始め或語で書かれたものが、幾度も〳〵譯され直されして、今日に至つたのである。從つて今日存して居るものゝ中には、英獨佛西等各國語の譯は素より、同じ英譯なら英譯の中にも種々の異本がある、そして地名の異同、記事の精粗等必ずしも一致しないが、こゝには簡單といふ便宜上からカツセル本の英譯を本として、之に數種の異本を參考した。紙數に限りがあるので、勿論十分なものではないが、是でも同紀行の大體は分ると思ふ。なほ原書によつて、くはしいことを見やうといふ人にはトマス、ライトの英譯などが便利であらう。

大正三年八月　　編者しるす

マルコポーロ　東方見聞錄目次

緒言……一——八
一　阿昧尼亞……八——一四
二　波斯地方……一五——一九
三　山の長老……一九——二五
四　戈壁沙漠地方……二六——三一
五　黨項……三一——三四
六　韃靼風俗……三四——四〇
七　忽必烈（一）……四〇——四七

八　同（二）……四七——五四
九　西藏地方……五四——六二
一〇　南支那地方……六二——七五
一一　日本島……七五——七九
一二　南洋諸嶋……七九——八四
一三　印度地方（一）……八四——八九
一四　同（二）……九〇——九六

目次終

マルコ・ポーロ　東方見聞錄

文學士　佐野保太郎編

緒言

マルコ、ポーロがいかにして此紀行を著はすに至つたかを說くについては、先づその父と叔父とから說かねばならぬ。彼の父はニコロ、ポーロと云ひ、叔父はマツフイオ、ポーロと云つた。ヱニヱズでは有名な家柄である。この二人が種々の貨物を積込んで、ヱニヱスを出帆し、コンスタンチノープルに安着したのは紀元一二五〇年のことであつた（この紀元には異說がある）。それから黑海を過ぎ、ソルディアと云ふ港に上陸して、數日の後、韃靼王バルハの宮殿を訪ひ、之に携帶の寶玉を御覽に入れて、其中特に高價なものを獻上したので、王も非常

に喜んで寶玉の倍にもあたる物を賜うた。

二人は一年間こゝに滯在して、さていよ〳〵故郷ヱニスに歸らうといふ其間際に偶々このバルハ王と他の韃靼王旭烈兀（フラーグ）との間に戰爭が起つて、バルハは脆くも敗れてしまつた。そこでひそかに此處をのがれて、遂にチグリス河畔に達し、それより沙漠を越え、かくて漸く波斯のボカラに着いた。こゝでも大に歓待せられて、據なく又三ケ年も滯留した。所がこゝにかの旭烈兀から元帝忽必烈に使はす使者がこの地に寄つて、二人に同行をすゝめたので、二人も遂にその氣になつて、かの使者の行に加はり種々の艱苦の後、一年を費して、漸く元帝の都に達した。

元の朝廷では珍らしい羅典人種が來たと云ふので、厚遇實に至らざるなく、忽必烈は熱心に西方の事情を尋ねた。例へば羅馬皇帝をはじめとして諸王のこと、それらの王の政治振りとか宣戰媾和の法とか、又羅典民族の生活習慣、特

に耶蘇教、法王、教會などに關する事をくはして尋ねた。この頃二人は既に韃靼語にも通じて居たので、答はいづれも頗る要領を得た。そこで忽必烈は大に滿足して、然らば二人を勅使として羅馬法王の許へやらうと云ふので、先づ之を貴族にはかつた。それから二人を召してよく意を含め、法王の廳に到らば、耶蘇教の教理に精通した者を百人送るやうにと云つた。蓋し忽必烈はこれらの人によつて、耶蘇教が世の何宗よりも立派な宗教であり、衆生濟度の唯一の道であつて、蒙古人の所謂神は惡魔である、然るに東洋人は皆欺かれて、こんな惡魔を拜して居るのだと云ふことを廣く臣下に知らしめやうと思つたのである。且エルサレムから歸る時にはキリストの墓前にある燈明の聖油を少し持つて歸るやうにと頼んだ。

是に於て二人は遂に元の朝廷を辭し、再びあらゆる辛酸をなめ、三年を經て、漸くにアルメニヤのギアツザといふ港につき、それより船でアクルといふ所に

ついた。時に紀元一二六九年四月である。所が法王クレメント四世は丁度先頃遷化して、今なほ後繼者がないと云ふ話である。是には二人も大に驚き悲しんだが、此の頃幸ひにして此處には法王の命を受けてチバルド、ニスコンチ、デイ、ピアセンザと云ふ人が居たので、例の使命の一部始終を申上げると、いづれその中新法王がお立ちになるから、それまで待つがよからうといふ答へである。そこで二人は其暇を利用して久方振りに故郷に歸つた。所がニコロの妻は既に世を去り、出發當時腹に居たのが今はマルコと云つて、早や十九歳の青年である。

法王の選擧は種々の故障のため二ケ年も延期されたが、又一方には忽必烈も待つて居るから、さうグズ〳〵はして居られない。遂に又意を決してアクルの大使の許に歸つた、但し今度はマルコをも連れたのである。それから大使の書翰を持つてエルサレムに行き例の聖油少しを貰つて、かのギアツザに向つた所

が、丁度其頃、羅馬から使節が來て、次の法王にはこのチバルトが選ばれたと云ふしらせである。

チバルトは新に法王の位について、グレゴリー十世と云つたが、法王となると早速、使をやつて彼一行を呼びもどした。そして自ら元帝に對する公式の書信を裁し同時に又溫厚博學を以て知られた二僧を送つた。所がこの二僧はギアツザまで來て、兵亂の爲逃げて歸つた。三人は詮方がないから、かの書信贈物等を携へ、寒氣、風雪、洪水等種々の困難を冒して、三年半の後漸くにしてクレメニス市に到着した。

三人の到着を見た忽必烈の喜びは一通りでない。それからいろ〳〵途中の出來事をきゝ、法王との交渉などを尋ねた。又マルコを見て、是は一體何者かと尋ねたので、ニコロは事の顚末を殘さず話すと、これにも大に滿足して早速朝臣の中に加へた。それからマルコは滿廷の寵兒となつて、やがて歐古の風習

にも馴れ、四个國の語にも通じた。又忽必烈はマルコの見聞をひろめる爲に、諸所に派遣し、マルコも往く所では一々その地の國狀風俗などを錄しておいた。かくしてマルコは益々帝の信用を得て、重用せられた。

ポーロ家の三人が元帝の朝廷に仕ふることも既に數年の永きに及んだ。金銀珠玉の財寶も益々殖えて、今は大した資產も出來たし、流石に故鄕もなつかしいので、一度歸つて見たいと云ふ氣になつて、丁度忽必烈の機嫌のよい時をはかつて、この事を申出たが、遂に許されない。所が偶然の事から一度歸國するも差支なしと云ふ命が來た。且旅券に相當する金符を授け、法王、佛蘭西國王、西班牙國王其他耶蘇敎國の諸王に對する大使に任じた。但しこの時差當つての使命といふは、印度アルゴン王の妃を其地に送り屆けると云ふのであつて、一行は十四艘の船に投じて、航行三ヶ月、先づ爪哇につき、それより印度洋を通つて、十八ヶ月の後、アルゴン王の國に達した。この航海中、水夫其他で死ん

だ者、男六百人、女一人といふ多數である。

既に使命も果したが、聞けば忽必烈は崩じたと云ふことであるから、今は再び元の朝廷に歸らうと云ふ氣も失せて、愈々故鄕の人となるべく、コンスタンチノープルに着き、ネグロポンドを過ぎ、かくて遂に紀元一二九五年といふ年、三人は無事ヱニスに歸つた。然るにいよ〳〵歸りついてその聖ジョーン・クリシストム街の自宅に入ると、豈はからんや、親戚故舊は皆自分等を忘れて居る、のみならず言葉も風も全然韃靼化して、少しもヱニス人らしい所がない。そこで大宴會などを催して、歸國の挨拶かた〴〵身分の證明などをしたので、漸くポーロ家のものと云ふことも明かとなり、マッフイオなどは其後ヱニスの官海で重要な位置さへ占めて、平和な生涯を送つた。

マルコ、ポーロも其後紀元一二九八年、ゼノアの水師提督ランパドリアと云ふ者がクルゾーラ島に押寄せた時、アンドリア・ダンドーロの指揮の下に一艘の長

となつて、海戰に參加したが、不幸にして捕虜となつて、ゼノアに送られ、數年間は空しく囚はれの身となつて居た。

所がからして彼が囚はれの身となつて居た間に、ゼノアの貴公子達はよく彼の處へ來て、航海談や冒險談を聞くを喜び、わざ〳〵其記錄をヱニスから取寄せさせた者さへあつた。そこで彼は遂にその見聞した所を同じ捕虜なるピサ人ルスチ、アノに筆記せしめた。これこの紀行の第一原本となるものである。

其後紀元一二六九年には再び自由の市民となつてヱニスに歸り、妻を娶つて三女を擧げた。併し男の子は一人もなかつた。

一　阿昧尼亞（アルメニア）

アルメニア（西方亞細亞、今は土、露、波の三國領に分割）は大小の二つに分れて居る。王は小アルメニアのセバストと云ふ都に住んで、其正義善政はよく國

內に行屆いて居る。國內には市府城砦が澤山あつて、土地は肥沃、凡そ人生必須の諸品は一として備らざるなく、御幸山幸も共に豐かである。只惜むらくは空氣がよくない。何でも昔は此國人は皆體軀肥大の好軍人であつたさうだが、飲んで騷いで、放蕩に身を持ちくづした報は覿面、今は柔弱な優男になつてしまつた。

海に近く立派な市がある。ギアッザと云ふ良港で、伊太利のヱニス、ゼノア等を始めとして、各國の商人共が集まつて來る。つまり此處には種々の貨物が集散するので、特に各種の香料、其他東方より來る高價な品物が澤山ある。云はゞ當地は東方諸國の定規市場とも云ふべき所である。

トルコマニアには三種の民族がある、其中トルコマン人は回教を奉じて居るが、元より無智蒙昧な粗暴野蠻なもので、人跡到底到り難いやうな山中に居を構へ、牧畜を業として居る。彼等は只この牧畜によつて命をつないで居るので

ある。この國にはトルコ馬とて良馬を產する。驢馬も亦立派である。

他の二種族は卽ちギリシヤ人とアルメニア人とである。こゝにも多くの都邑があつて、商工業共に盛んに、世界一の毛氈も出來るのである。

次に大アルメニアは隨分大國だが、是も矢張り韃靼に屬して居る。こゝにも多くの都邑があつて、首府はアルジンガンと云ひ、世界一の美麗な粗硬布の製產地である。

夏になると韃靼人は大勢その家畜の群を率ゐて、牧場に適した此邊に來る。併し冬になれば、降雪の爲、又暫らくは暖かい所に歸つてしまふ。かの太古この世界に大洪水が起つた時に神のすゝめでノアが乘つたといふ所謂ノアの方船(はこぶね)は今猶このアルメニアの山中に殘つて居ると云ふ話である。

この國の北方にゾルザニアと云ふ州があるが、こゝには奇妙な泉があつて、油のやうな液體(石油のこと)が滾々と湧出して居る。肉の料理などには向かな

いけれども、燈火用、其他物に塗るなどには頗る重寶である。而も湧出の量甚だ多く、日々駱駝に積んで運搬する程である。

州の二方に海がある。一は卽ち黑海で他は裏海である。裏海は周回二千八百哩、他の海とは全く獨立して居るので、宛然一個の大湖水である。且つその中には數多の島嶼があつて、そこには壯麗な都府城砦がある。又その中の或島には、成吉思汗(ジンギスカン)の難を逃れて、波斯より落ちのびた連中が往んで居る所もある。

ゾルザニアの人民は耶蘇敎徒で、他の耶蘇敎徒と同樣の敎儀を奉じ、丁度西方諸邦の傳道師のやうに頭髮を短くして居る。こゝにも數多の市邑があつて、多額の絹を產し、美しい織物を拵へて居る。

バグダットは一個の大都府、サラセンの法王とも稱すべき大カリフの住める所である。此市を通じて一條の流れがあるが、海に至る距離は頗る遠く、實に十七日程に及ぶといふことである。船に投じて之を下れば、チン市の側を過ぎ、

海に達するに先だつて先づバルソラ府に來る。この邊は世界一の波斯(たうめやし)の產地である。

バグダットには美麗な錦繡や、禽獸虫魚種々の模樣を畫いた花綾、天鵞絨などが出來る。又耶蘇教諸國の眞珠はすべて此地で工を加へる。大學もあつて、回教の教儀乃至醫學、星學、地文占術等の研究が行はれて居る。

かつて韃靼人が征服の翼をひろげ始めた頃には、四人の兄弟があつた。即ち太祖成吉思汗(ジンギスカン)の子、拖雷(ツルイ)の子供で、長を蒙哥(マンダ)と云ひ、セディアの領主であつた。こゝに彼等は天下の大統一を企圖して、一人は東に、一人は北に、一人は西に、一人は南に、各々活動の步調を進めた。この時南に向つたのは三男の旭烈兀(フラーグ)である。時は紀元一二五〇年、彼は步兵の外、更に一萬騎の兵を率ゐて、謀をめぐらし、其軍勢の大部分を途中にかくして、逃走の樣をよそほひ、巧にカリフを伏兵の場所におびき寄せて、大勝を得た。そして市を奪ひ、カリフを生擒とし

たのであつた。所が此市には意外にも非常な財寶が藏されて居たので、一同は思はず一驚を喫したのである。而も旭烈兀はカリフを呼んで、この守錢奴め、徒らに財寶を蓄積するに汲々として、敵を禦ぐの術を知らず、遂にこの耻を見るとて、罵詈した上に、一切の飲食物を與へず、遂にその財寶の樓中に餓死せしめた。

併しこの一事は耶蘇教徒がカリフに對する正當の所罰だらうと思はれる。即ち紀元一二二五年、彼は耶蘇教徒を已れの回教の方へ改宗させやうとして、聖書に所謂「我まことに汝等に告げむ、もし信仰あつて疑はずは、此無果花(いちじく)にをなすが如きのみならず、此山に命じ、其處より移されて海に入れよと云ふとも亦ならむ（馬太傳）」と云ふ語を利用して、すべての耶蘇教徒――ネストル派もジャコバイト派もすべてを呼んで、十日の中に一の山を移してしまへ、もし出來なければ、回教に改宗するか、殺戮されるか、二つに一つと云ひふちせた。

そこで彼等耶蘇教徒は一所懸命になつて祈つた。かくて八日間祈つた後で、一人の靴屋が或牧師へのお告げにあつた通りを實行する事となつた。是はかつて靴をはきかけて居た一婦人のふと白い脚を現したのを見て、思はず情慾を惹起したが、聖書に所謂「我汝等に告げむ。凡そ女を見て、色情を起すものは、心中既に姦淫したるなり。もし右の目、汝を罪に落さば、抉出して之を捨てよ。そは五體の一を失ふは全身を地獄に投入れらるゝよりは勝れり。(馬太傳)」の語を遵奉して、實際其右の眼球を抉出してしまつたのである。

かくて定めの日に於いて、彼は他の耶蘇教徒と共に十字架に從ひ、其手を高くさゝげて、「神よ、この民に慈悲を垂れ給へ」と祈つた。そして其山に動けと命じた。ところがカリフをはじめ民は一同驚いた。山は直ちに動いたのである。で其以來は此日及び其前夜は斷食して神聖を保つことゝなつて居る。

二　波斯地方

波斯(ペルシヤ)には八つの王國がある。即ちカスピン、クルディスタン、ロール、スシスタン、スバアン、シラス、ソンカラ、チモカインの八つである。この邊からは立派な馬を產して、印度地方へ輸出して居る。併しその驢馬に至つては更に見事なものである。飼育するには手がかゝらず、そして旅行や運搬には非常に役に立つから、從つて價の如きも馬よりは却つて高い。駱駝もあるが脚は餘り早くない。併しともすると全く草木のない荒涼たる荒原の續くこの地方では、是も亦必要である。

大體この地方の土人は回教に屬するもので、殘忍酷薄、强盜殺人を事とせるものであるから、もし商隊を組まずに旅行する者でもあれば、直殺されてしまふのである。併し都市には熟練な技術家もあり、金銀乃至刺繍などで驚くべきも

のを拵へて居る。回教の戒律では飲酒は嚴禁せられて居るが、奇妙な事には彼等はその酒を煮て味を變ずる、味が變れば既に酒と云ふ名も變つて戒律にも觸れないことゝなるのである。

ヤスデイは波斯國内の大市で、絹系製造の盛んな所、交易も盛んである。次にキルマンは波斯の一王國、此邊の山中には藍寶石と稱するものを始めとして種々の寶石が出る。又武具の類も製造される。其他婦女子は絹で巧者な細工をするが、その繡の禽獸などは實によく出來て居て、將に踊躍せんとするばかりである。

こゝより更に茫漠たる平原を通過すること八日行程、やがて斜面の所に達する。この間には市街城邑の所々に散在せるものがあるが、この險しい斜面に到れば、只樹木の欝々として生茂り、果實の累々として森の梢を飾れる許りで、所々に牧人の小舍を見る外、人影は更にみとめぬ。此邊、冬は非常に寒い。

之を過ぐれば又廣野に出る。こゝにはマンヅと云ふ城下があつて、往時は市區宏大、人家稠密の大都であつたが、一度韃靼の碧蹄に蹂躙せられて以來は、すぎし昔の面影もない。この地の家畜中には實に特殊の大牛がある。白のうすい毛で、鈍い太短い角があり、背中には駱駝のやうな瘤がついて居る。馴らして荷物を運ばせるので、鞍を置くと駱駝のやうに膝を折り、荷を受取つて又立上るやうにしてある。其他羊は大きさ殆ど驢馬位もあり、尾は長廣く、よく三十磅の重量に堪へ、美しく肥太つて肉も頗るよい。

當國にも平原には數多の市邑があるが、皆土壁を以て之を繞らし、囚賊カラオンの侵略にそなへて居る。抑もこのカラオンと云ふのは印度婦人と韃靼人との混血兒で、其種族一萬人はかつて土耳古王察合臺（ザガタイ）（窩濶臺（オゴタイ）即ち元太宗の兄）の姪ヌゴダルに屬したのである。彼ヌゴダルは印度なるマラバール人が土耳古帝アシデンの領する所なるを聞くや、其叔父に告ぐる間もなく、直に到つて、

他の市と共にデリーを奪ひ、新領土をこゝに作つた。そして彼等の一軍は皆印度婦人を娶つて、このカラオンを作つたのである。

前記の廣野は南方五日行程の距離に廣がり、其南端には凡そ二十哩の坂路がある。この間は道路頗る險惡、盜賊の害も決して少くない。それより又約二日行程、風景のよい平原に來る。オルムスと呼ぶ所である。やがて海岸に出る。この海上にはオルムスと呼ぶ島があつて、印度より香料、眞珠、寶石、錦繡、象牙等の貴重品を携へて來る商人多く、自ら一大交易場となつて、其下には幾多の都市城邑附屬し、キルマン國の首府となつて居る。

夏季炎熱が烈しくなると、住民は皆水上の亭に赴く。九時から正午までの間は砂地から吹いて來る熱風が實にたまらぬ。殆ど窒息せんとするばかりであるから、已むをえず水邊に逃れるのである。かつてキルマン王はオルムス王の貢を怠つたのを責めて、騎兵一千六百、歩兵五千を以て攻寄せたことがあつた

が、この熱風の一撃に全軍殆ど窒息する所であつた。

住民は黑人種で回教徒である。妙なのは此習慣で、主人が死ねば、殘つた妻は四年の間、日に一回づゝ哭するのである。で此國には哭することを職業として居る女があつて、日々哭きに雇はれてゆくさうである。

三　山の長老

サラセン人の語でムレヘットと云ふと、「異教徒の地」と云ふことで、其人をムレヘチンと云ふ。即ち彼等回教徒の間で異教徒と云ふのは我々耶蘇教徒のパテリンと云ふやうなものである。

さて此國のことに就ては既に說き終つたから、次には所謂「山の長老」と云ふ王に就て話すとしやう。この王、名をアロードインと云ふ。回教徒である。彼は嶮峻到底近づき難いやうな山の間、樂しい谷間に、美しい庭を作つて、こゝ

には手に入る限りの名木珍果を植ゑ、甍を並ぶる宮殿には、金光燦たる室があつて、華麗な繪畫や絹布の掛氈が飾つてある。又酒、乳、蜜、清水などは皆細管で宮殿の中、到る所に流通し、歌舞音曲に長じた美人は春風に錦繡の袖をひるがへしつゝ、花さく庭に蝶の如く舞ひ、鳥の如く歌つてゐる。抑も彼がこの桃源境を作つた所以は、モハメッドが、敬虔な信徒に對しては、かゝる現世の樂園を與へることを約したからである。併し谷の入口には堅固な城壁があり、又その通路は秘密であるから、何人と雖も無暗に出入することは出來ない。

アローディンは十二歳乃至二十歳位の勇敢な少年を集めて置いて、日々之に回教の所謂樂園とはどんな所であるかを敎へておく。かくて好い頃だと思ふと、その十一二人の者に酒をのませる。やがて醉つて夢中になると、之を前記の宮殿に運ぶのである。所がこゝには聞いた通の事物が備はつて居るのであるから、ふと目がさめると、酒池肉林の間、嬶媚たる美女は來つて彼等の傍に侍し、

我をめぐるは只歡樂のみ。是に於てか彼等は遂に樂園に來たものと思のてしまふ。

かくて數日、この歡樂の中に暮らすと、又夢中に元の所へ運び出される。すると、かの長老は是等の少年を呼び、何處へ行つて來たかと尋ねる。一同はお藏を以て樂園にまゐりましたと答へる。そして見聞して來た所を遂一述べる。そこで長老はかう云ふのである。「いや是は我豫言者モハメッド樣の御命令じや。何人にもせよ、苟も我大神を守るものには、樂園に入ることを御許し下さる。されば汝等も若し予に對して從順ならば、云ふまでもなく此お惠みをいたゞくことが出來るのじや。」もうかうなると、士は已を知る者の爲に死す、よしや一命は捨てゝも彼等はこの長老の命を奉ずるを以て無上の光榮と思ふのである。是に於てか他の王や彼の仇敵は皆この決死の暗殺者の手に倒れたのである。

かくて彼は暴主（タイラント）となり、四方を風靡し、代官をダマスクとクルディスタン

との二ケ所においた。是等の代官も亦例の少年等と共にその命を遵奉したものである。

彼は又此邊を通行する旅客をおびやかして掠奪をした。所が紀元一二六二年に至つて（この年數は一般史家の說と少し違つて居る）旭烈兀（フラーグ）は兵を遣はし、之を討伐した。是に至つてさしもの金城鐵壁も三年の籠城に、遂に糧盡き、大將は戮され、樂園も遂に破壞されてしまつた。

さて又話が前にもどるが、かのチモカインを出ると、美しい山野牧場の連れる愉快な國に入る。地味は肥沃で、作物は實によく榮えて居る。こゝをゆくこと六日、それより四五十哩は又一滴の水もない沙漠を過ぎて、サブルガンと云ふ市に達する。次にバラク府。こゝも昔は華麗壯嚴な大理石の宮殿が人目を眩ぜしめたる有名の大都であつたが、韃靼軍の蹂躙以來は全く見る影もない。こゝで歷山（アレキサンダ）がダリウス王の女を娶つたと云ふ話が傳つて居る。

それより人煙絕えたる荒野を、ゆくこと二日の後、タイカンと云ふ城下に來る。沃野連る所、穀物は豐かに南方に高く聳ゆる山の中には堅い鹽から出來たのがある。先づ一ケ月位かゝつて行く間の住民は皆鹽をこんな山から採るのである。其堅さは鐵槌を以て碎かねばならぬ位で、質も世界一、其分量も世界中の人間が使ふに十分と云ふ位である。

是より東北に向ふに、地味は一般に豐かであるが、住民は殺人者や不信神な回教徒の酒呑みである。當地の酒は煮るので非常に味がよい。此邊では男の頭に數尺の繩を結はへて居る外、帽も何もなく、身にも野獸の皮で作つた股衣（もゝひき）、靴などを着けた位で、別に是と云ふ衣服（きもの）はない。

三日の後には、平原の中にセッツムと云ふ市がある。住民は此國特殊の語を用ゐ、牧者は山中に穴居してゐる。それより更に三日の間は全く人家のない所、やがてバラシャン州に來る。回教徒で、固有の語を使つて居る。その王家は代

々世襲で、歴山大王とダリウスの女との子孫であると云ふことである。こゝにはバラッサス、其他貴重な寶石類を産するが王の許可を得ずして、之を採掘或は輸出することは國法として嚴禁せられ、敢へて之を犯す者は死刑に處せられるので、一人の犯罪者もない。但し皆王の所有になつて居るから、王だけは勝手に贈物にも貢物にもする。又金銀と交換もする。只あまり通俗な安價なものにしたくないので、多いにも係らず、こんな事をするのである。

國内は非常に寒く、夥しく名馬を産する。實際立派な馬で、體は大きく、力は强く、足は早く、且蹄鐵なしでも、よく巖石の上を馳驅する位堅固な蹄を持つて居る。あまり昔の事でもないが、歴山の愛馬バセフアラス（同大王の印度征討中に死んだので、その記念としてバセフアラと云ふ市さへ印度に作つた）と同種の馬で、額の紋までそつくりなのがあつたさうだ。是は一切國王の叔父に當る人が所有して居たのであるが、王が懇望した時、一頭もやらなかつたの

で、叔父は遂に殺されてしまつた。そこで夫人は之を怨んで、其種の馬を殘らず殺して、全く種を絶つてしまつたと云ふ話である。

パラシヤン州の南方十日行程にしてバッシア州あり、更に七日行程にして、ケスムール州がある。住民は自國固有の語を有し、宗教に於ては特にひどい偶像信者で、偶像に物を云はせたり、日を暗くしたりする狡猾な魔術使ひである。こゝより水路印度に通ずる。暑さはさしてひどくはないから、眞黑とは行かないけれども、男女共に肌は褐色である。

この國には幾人かの隱者があつて、僧院又は洞中に住み、酒肉を斷ち、色慾を退けて、偶像に奉仕し、一心に長壽延命を祈願して居る。是等の中にも有名な高德も澤山あつて、民の崇拜も一通りでない。この國の人は決して殺生せず、一切血を流すと云ふことをしない。で若し肉を食ふなら、彼等の中に住んで居るサラセン人に殺させるのである。こゝの珊瑚は最も高價である。

四　戈壁（ゴビ）沙漠地方

サマルカンドは重要の大都であつて、市の四方には美しい園や野原が之を飾つて居る。元帝に隸屬し、住民中には耶蘇教、回教兩教徒が相混じて居る。併しあまり親密ではない。そしてこの爲に面白い奇蹟が起つたといふ話がある。凡そ百年ばかり以前のことだが、此國を支配して居た太可汗（太宗）の兄察合台（ザガタイ）といふ者が種々說かれて、耶蘇教に歸依してしまつた。此時耶蘇教徒の方では洗禮者聖（セント）ジョーンの爲に教會を建てたが、是は中央に只一本の柱があつて、その下に置いた四角な石は、サラセン人の建物から取つて來たといふ狡猾な仕方であつた。然るに察合台の後、ついで位に即いた王子は父とは信仰を異にしたので、サラセン人は此機逸すべからずと、即ち彼の石を取り返さうとした。併し耶蘇教徒の方でも中々きかない。相當の價は拂ふから、是は此方へくれと云ふ。

サラセン人の方でも亦其石の外は何も入らないと云ふ。かくて遂に其柱を引上げて石を取除いてしまつた。所が實に不思議なことには柱は其まゝ元の通りに立つて居たと云ふ話である。

次にヤルカン州。更に東北東に進めばコタン州共に元帝の甥の領分である。それより更に進んでゆくと、ポエム州と云ふのがあるが、こゝには一個の奇習がある。即ち男が何處へか行つて、二十日しても歸らなければ、妻は他の男と結婚しても差支なしと云ふのである。但し女の出た場合にも同樣である。

以上の諸州即ちコタン、ピエム等よりロップ市に至る間は所謂天山南路の境界内にある所である。

チヤルチヤンは韃靼に屬し、その首府も同じくチヤルチヤンと云ふ。州内には數多の都市城砦あり、川よりは碧玉、白瑪瑙等種々の寶石を產出する。ピエムより此處に至る間は全然砂地で、水は非常に惡く、良好のものに至つては極

めて少い。で軍隊が此地を通過するやうな事があると、土人は皆妻子、家畜、器具等總ての物を携へて、其清水のある所まで逃れるのである。且敗獲後ならば其穀物を砂の中に隱してしまふ。やがて風が吹くと、砂上の足跡は消失せるから、敵は遂に之を追跡する事が出來ないのである。

こゝより五日の間。苦い水の外には水といふものゝない沙漠の旅を續けてゆくと、ロップと云ふ大都會に來る。東北東に擴がれるロップ沙漠は此處より入るので、住民は元帝に隷屬せる回教徒である。

商人が此沙漠を通過しやうとすると、先づロップ市で必要の品を用意し、砂漠中で萬一飢渴に迫るやうな場合が起ると、連れて來た驢馬や駱駝を屠るのである。蓋し彼等が特に駱駝を選む所以は少許の肉を食つて重荷に堪へるからである。一寸之を横ぎるだけでも、優に一ヶ月の食料は準備しなければならぬのだから、もし之を縱にでも行かうものなら、一年位はかゝるであらう。

こゝにこんな話がある——この沙漠には澤山妖怪が住んで居て、種々の幻を人に示し、遂に之を殺してしまふと云ふのである。若し一人連中に後れて迷つてでも居れば、誰ともなく自分の名を呼ぶ。誰か呼んで居るなと思つて、道を外れて歩いてゆくと、全く分らなくなつてしまふ。やがて日が入ると、又連中の方では見えなくなつた人の聲がするやうである。かくて此方も同樣沙漠の露と消失せてしまふのである。其他、時には空中に音樂の聞える事や、軍隊の太鼓や聲が聞える事などもある。それで皆獸の首に鈴をかけて一所に迯み、もしやむを得ず誰かゞ留る場合には標(しるし)をおくことゝして居る。

沙漠を過ぎて東北東にサシオン市がある。タングート州に屬し、元帝の領分である。住民は主として回教徒で、中には稀にネストリアン派の信者もあるが、熱心な偶像崇拜者多く、市中には種々の偶像を安置せる僧院ありて、多くの犧牲を供へて居る。子供の生れた時には直に之を偶像に托し、同時に家には羊を

飼ふのである。かくて翌年の祭には盛大な式を行ひ、之を子供と共に神に捧げる。やがて羊は煮て、子供が息災の祈禱の濟むまで偶像の前に置くのであるが、此間に神がその肉の美味を吸ふのだと思つて居る。それから家族一同集まつて、有難さうにお餘りを頂戴する。

次に葬式の際は、其親戚が占星者に使を遣つて死者の生年月日時刻等を告げると、占星者は星座を調べて葬式の日を決定する。萬一星が悪い時には一週間乃至六十日間も屍體を箱に納めたまゝで、家の中に置く事もあるが、或方法を施して悪臭の出るのは防ぐ。即ち屍體には香料を塗り、立派に塗つた棺に納めて、其上に美麗な錦繡をかけ、出棺までは日々之に酒食を備へ、家族も共に食するのである。所が又星の都合で棺を正門から出さず、壁を破つて出すこともある。兎に角何か凶事が起ると、死人の靈がたゝつたのだと云ふ。さて火葬の爲、市中を送つて行く時は、道に入口を絹で蓋うた小舎を作つて、こゝに屍體

をおき、其前にパン、肉、柔い食物などを供へる。かうして遂に火葬場に來ると、木皮製の紙片にかいた男女の奴、馬、駱駝、金錢、衣服の類を屍體と共に火にするのである。つまり來世に於ては是等の書にある通りの奴婢、家畜、金錢等の所有者として、永久に富貴なれよと祈るのである。

五　黨項（タングート）

カムール（哈密）は廣大なるタングート國内（西藏の北方）の一州にして、元帝の版圖である。州内多くの市邑あり、首府は州と同名のカムールと云ふ。二個の沙漠の間に介在し、一は即ち前述のもの、他は稍々小さく、三日行程位である。若し旅客が此地を通つて或家に宿るとすれば、主人は喜んで之を迎へ、家族一同に命じて滞在中は必ず其命を遵奉せしめる。そして其滞在中、主人は何處か外へ行つて、其間客は嫁も娘もすべて勝手に我妻とする。一體この國の女

は皆美人で、夫の言には何でも彼でも盲從して居る。所が夫は又とんな事をするのを名譽と心得、神も喜び、お蔭で家も繁昌するものと思つて居るのである。所が此事遂に元帝の耳に達して、かゝる惡風汚俗は速に廢すべしと云ふ命が出た。是が爲約三年間は中止の姿であつたが、どうも此迄通り豐作はなく、家内に凶事が多いと云ふので、元帝に總代を出し、命令の撤回を願出た。是には帝も仕方がなく、汝等自ら恥辱を欲せば、よろしく舊慣に從ふべしと返答した。總代がこの返答をもたらすと、國民は大悅びて、今もこの風習は依然として全國民の間に遵奉せられて居る。

カムールを過ぎてチンチンタラス州に入る。この州には所謂サラマンダー（火蛇）を產する。この毛から作つた布は火に投じても決して燃えない。併し其實石から拵へたものである。これは此邊の山から出る一種の鑛物を日に乾し、眞綸の白でついで、洗滌の後、その纖維を績いで綴るので、之を洒すには一時

間許り火中に投じておけば、雪を欺くやうな白さとなる。汚れた時にもかうするのである（所謂石綿である）。

次にスツキル州に來る。住民は殆ど偶像信者であるが、中には少許の耶蘇教徒もある。

カンビオン市はタングートの首府である。耶蘇教徒は此地に大きな教會を三つ持つて居る。猶外に回教徒、偶像教徒もある。就中、偶像教徒は多くの僧院を有し、その中には石像、塑像、木像、種々の偶像あり、その形も大小種々で、いづれも極めて精巧である。

所が此處では私通姦通が別に罪惡とはせられては居ない。何故かと云ふと若し女の方から挑めば、構はぬと云ふのである、但し男から挑む場合は罪惡である。彼等は月の盈虛を以て一年を計算し、月の内、或は五日、或は三四日、齋戒して、此間は禽獸を殺すことなく肉食することもない。僧侶以外の俗人は二

三十人も妻を娶る。娶ふことさへ出來れば、何人でも構はない、併し最初のが正妻となつて居る。夫たるものは決して妻の財產を納れることはないが、妻に對しては、家畜、奴婢、金錢等出來るだけの世話をする。所がもし其妻に厭氣がさせば、何日でも構はず離婚する。又血のつゞいた者であらうが、義母であらうが平氣で之を妻にして居る。

カンピオン市より北方沙漠に連る所、エヂナ市までは十二日行程。以上の諸州並に諸市はすべてタングートの疆内である。

六　韃靼風俗

前記の沙漠を過ぎると和林（カラコルム）である。市は周囲三哩、此近邊には石がないので、泥土を以て堅固な墻壁が構へてある。そしてこの近傍には一大城あり、中に輪奐の美を極めたる宮殿がある。抑々韃靼人は往時只この近邊に集まつて居ただ

けであつたが、それが今日のやうな大勢力を得るに至つた徑路は如何、以下少しく之に就いて說述することゝする。

彼等は元北方のクルヂ、メルヂ地方に居住して居た。こゝには人家稠密の町はないが、天に連る平原には美しい牧場あり、到る處に川や湖がある。彼等の上には之を支配する王と云ふものはなく、こゝの國語で云へばアンカンと云ふ大王に貢を奉つへ居た。或說によれば此アンカンといふ語は「敎會長老」又は「長老ジョーン」と云ふ意味だと云ふ。韃靼人は此王に毎年家畜總數の十分の一を奉るやうになつて居たのである。所が年所を經るに從ひ彼等は益々增殖したので、アンカンは恐しくなり、遂に之を世界の各地に分散せしめやうとした。そして若し或者が亂を起せば、直に他の所から三四百の韃靼人を其處へ送つて、其勢を殺ぐことゝし、貴族を代官として各地に遣つた。こゝに於てか韃靼人は自己の破滅の近きを想ひ、離散を厭つて、安全なる北方の沙漠に移り、從來の

貢物をも拒むに至つた。かくて紀元一一六二年頃、彼等は其中より賢明勇敢なる一人を選んで王とした、是即ち成吉思汗（ジンギスカン）である。彼は初より民を治むるに正義正道を以てしたので、王と云ふよりは寧ろ神として畏敬せられた。是に於てか其名聲は四隣を壓倒し、全韃靼は皆謹んで其命令をきくに至つた。それより彼は幾多の勇將猛士を率ゐ、先づ其四邊の都市州郡を征服したが、すべて善政を施したので、民は却つて之を歡迎した。かくて非常な權勢を得るに至つた。彼は政略上使者をアンカンの許に遣はし、その女を貰ひたいと云つた。ところがアンカンは非常に怒つて潛越の至りであると一言の下に拒んだ。そこで彼は大軍を募つて旗鼓堂々、進んでタンダックの平野に陣し、再び王に使をやつて「しつかり防禦せよ」と云つた。王亦大軍を將ゐてこゝに會し、兩軍相距る約十哩。成吉思汗は先づ占星者を呼び、勝敗を占はしめた。占星者は一本の草を縱に二つに割いて之を地に差し、一方には成吉思汗一方にはアンカンと書いた。

さて成吉思汗に云ふには、かうして呪文を唱へる中に、神の大御力によつて、この二片の草が戰ひ始める。そして大王の草がアンカンの上に倒れゝば勝利は確に大王のものだと云つた。所が果して成吉思汗の勝利となつた。之を見た韃靼軍はもう勝利は期して待つべしと、直に進んでアンカンを殺し、國を奪ひ、其女も遂に成吉思汗の手中に歸した。

成吉思汗は韃靼最初の王である。次は太宗窩濶臺（オゴタイ）、次は定宗貴由（クユク）、次は蒙哥（マンゴ）、次は世祖忽必烈（クブライ）である。この忽必烈は殆んど六十年間も政權を握つた人で、祖先以來の勢力で四方を征服し、全世界を我有とした未曾有の豪傑である。

韃靼の女は夫に對しては實に忠實である。彼等の間にあつては姦通は最大恥辱である。併し男は養ふことさへ出來れば幾人妻を娶つてもよい。是等の女は皆一つ家に住んで、厭な文句一つ口にすることもなく、よく協力一致して商業

に從事し、夫の爲、家の爲に働いて居る。男は又家事には一切干渉せず、只狩獵放鷹、武術などに從事して居るだけである。

彼等は牛羊等の家畜を澤山飼育し、夏の間は是等と共に牧場や森林のある山中の涼しい所に暮らし、冬になると二三ヶ月もかゝつて、更に暖い牧場に都合のよい國に移つてゆく。家は棒や毛氈で屋根を作つて、形は大抵圓く、之を四輪の車で運ぶ。勝手な時に疊みも擴げも出來れば、又建てもことはしも出來るのである。所が一つ妙なことには、何處へ行つても其入口は南に向ける。この外又毛氈で蓋うた二輪車の小さつぱりとしたのを持つて居るが、其屋根は質が細いから雨のもる心配はない。是は牛か駱駝に曳かせて、中には妻子、必要な家具などを入れ、雨露の爲に損じないやうにしたものである。

彼等の信仰はかうである。――天上に唯一無二の神があつて、彼等は日々之に對して香を焼き、祈禱をする。なほこの外にもチチゲイと云つて毛氈か何か

で蓋うた小さい像があるが、是は皆その家に持つて居る。且この神には妻子を作つて、妻の像は左に、子供のは前に安置する。即ち是は現世の諸事諸物を保護する神で、子供も家畜も五穀も皆そのお蔭を被るものとし、非常に崇拜して居るのである。それで食前には先づ其口に煮た肉の脂肪を塗り、他の諸靈の爲にも肉汁を注いで、その上で自分等も飲食する。

まだ結婚しない中に或家の息子が死んで、同時に又他の家の娘も未婚で死ぬと、双方の親が寄つて、死人同志で結婚させる。そして契約書を作り、奴婢や家畜の類を焼くことは前に述べたと同じやうな事である。

戰時には王は十萬騎の兵を出すが、命令を下すに都合よいやう、之を十、百、千、萬といふ風に區分してその上に長を任ずる。そして進軍の際には諸方に斥候を出し、不意の襲擊に備へるのである。各人大抵牝牡の馬十八頭位を有し、常に毛氈製の小舍を携へて雨の時にはこゝに入る。若し何か緊要な事件が起れ

は、十日位は斷食のまゝぶつつゞけに馬を走らせ、只馬の脉から生血を吸うて生命を支へて居る。兵糧には乳を煮て凝結させた堅い糊のやうなもの十磅許りを携へ、毎朝その半磅許を取つて、フラスコか革瓶に入れ、好きな程水を加へて混合し、馬上で食する。敵に逢へば、馬を縱横に走せつゝ射ることもあり、逃走を裝ひながら射ることもある。かくて敵が敗けたと見ると、再び合して縱横に馬を驅りつゝ飽くまでも勝つ。併し今では雜組人も諸種混じたから、從つて其習慣も混じてしまつた。

七　忽必烈（一）

是よりは現時の大可汗、忽必烈（クブライ）の事業、實に驚嘆すべき其の大事業に就いて述べやう。

西洋の語で云へば彼は先づ帝王中の帝王、開闢以來未曾有の大帝王で、人民も

都市も財寶も、すべて其の掌握する所である。成吉思汗の後裔で、雜組の第一皇子、國から云へば第六世の君主に當る。紀元一二五六年（實際即位の年は一二六〇年）位に即いて、今や壯齡三十七歳。非凡の才能と非常の威嚴とを以て臣下に臨んで居る。資性勇猛、よく武藝に熟達して身心共に剛健、先づ其の才能を以て他の兄弟を壓倒し去り、遂にこの至尊の位に登つたのである。かつては勇敢無比の兵士として、或は智勇兼備、未曾有の良將として、戰場を馳驅したことも無數であつた。併し一旦九五の位に登つてからは、自親しく矛を取つて硝煙彈雨の間に立つたのは只一回だけ。常に皇子や大將を派遣することゝして居る。

彼の叔父に乃顏（ナヤン）と云ふ者がある。當時三十歳の血氣壯んな年配で、許多の國土を領し、呼べば直に四十萬騎の大軍が走せ參ずるといふ身分、空しく甥風情の下に屈して居ては己の名に係ると思ひ、紀元一二八六年（實は一二八七年）

一舉直に帝國を忽必烈の手より奪ひ去らうとして先づ海都（ハイドゥ）と云ふ將を遣はした。是は土耳古方面を司れる者、忽必烈の甥ではあるが、是亦夙に叔父の專横を憤つて居た所であるから、早速承知、自ら十萬騎の兵に將とし、來り援けることを約した。

是に於てか二人は共に兵を募つた。所が彼は早くも之を聞知し、直に人を遣して、敵の消息を通ずる道を塞いでしまつた。かくて一方ではカンバル近邊、十日行程以内にある兵を招くと、二十日の間に騎兵十六萬歩兵十萬の大軍を得た。但し其大部分は鷹匠又は彼の一族である。さて此大軍を將ゐて、晝夜兼行、乃顏の國へと急行した。やがて二十五日にして達したので、二日間は兵を休め、先づ者をして全軍の前に勝敗を占はしめた。これ部下を勵ます一手段である。

或朝の事であつた。乃顏は軍備を怠り斥候も除に出さずに、悠々として帳中

に惰眠を貪つて居た。この時忽必烈は先づ疑兵を山上に置き、己は四頭の象の背に負へる大櫓の上に座を占め、之には弓手、弩手を滿載して、日月の旗をひるがへしつゝ堂々として出陣した。かくて彼は其軍を三つに分ち、一は敵の右方に、一は左方に。そして各一萬騎には槍を携へた歩兵が從うて居る。逃走の際には背後に躍り出で、勝利の時には其槍を縱横にふりかざしつゝ敵を打倒すやうに訓練したものである。

やがて兩軍は戟を交へた。慘澹たる光景は朝より夕べにつゞいた。遂に乃顏は俘にせられて、忽必烈の面前に引出された。忽必烈は臣下に命じて、之を二枚の毛氈の間に縫ひ合せてしまへと云つた。是は太可汗の血統に屬する者の血が日光や空氣にさらされないやうにして、窒息するまで振つて〳〵振りまくらんが爲である。

乃顏はひそかに洗禮を受けて、耶蘇教徒になつて居た。併し心から歸依湯傳

して居るものではなかつた。只その旗じるしには十字架をつけ、部下には無數の同教徒があつたけれども、すべて戰場の露と消えた。所が忽必烈の軍にあつた猶太人やサラセン人は十字架が、かくも不幸にあつたのを見て、耶蘇教徒を嘲笑したので、彼等は之を忽必烈に訴へ出ると、彼は大に猶太人やサラセン人の所爲を責めて、一方耶蘇教徒には「汝の神は決して乃顏などを助けることはない。何も恥ぢるには及ばぬ。神は公平である。不義不正に與する氣遣ひはない。乃顏は神の反人、公平の敵である。反旗をひるがへしつゝ　猶神の冥助を祈つた所で、正義の神が此の如き者をお助けになることはない。」

忽必烈は大勝の後、カンバルまで引返して、耶蘇復活祭までは此地に滯在した。かくて其復活祭には部下の耶蘇教徒を召し、自ら聖書に接吻して、つゞいて其貴族等も同じやうに接吻させた。又サラセン人、猶太人、其他の異教徒の大祭にも之と同樣の事をやつた。つまり神の御力を借らんが爲で、就中耶蘇教

は最も好むやうであつた。

士卒の功勞に對して賞を行ふには、十二人の貴族を顧問としておき、各將校の功績を視察せしめた。かくて將校にはそれ〴〵金の札を授け、其功勞に應じて百人の隊長より千人の隊長に、千人より萬人へと云ふ風に昇せて行つた。又その札は位に應じて金銀など〻種類に差があり、その上には「大神の稜威及び其我帝國に授け給ひし御惠みにより汗の名に幸あれ、まつろはぬものは滅べ」と記してある。

忽必烈は丈(たけ)から云へば所謂中背だが、身體の釣合よく、生々としたその顏には黑い涼しい眼と恰好のよい鼻とがあつて、可なりの好男子である。妃は四人あるが、四人共皆正妃である。併し彼の後嗣たるべきものは其中一番早く生れた子と云ふことになつて居る。

四人の妃はいづれも皆立派な宮殿の中に、各自その局(つぼね)を持ち、之にかしづく

侍女は三百人ばかりで、その外になほ數多の官宦といふものがあるから、少くとも一家の中には一萬人の人間が居る。

忽必烈は猶この外にも無數の女官をおいて居る。一體韃靼の一種族に非ルグートと云ふのがあるが、是は頗る美人に富んで居るといふので、隔年こゝへ使者を遣はし、美人の搜索をさせるのである。そしてこの使者は四五百人位も美人を連れて歸つて來る。すると又朝廷の方には之をしらべる審査官があつて、眼がどう、鼻がどう、口元がどうと云ふ具合に一々仔細に檢査して、採點する。そして其中好い所を持つて來る。すると又今度は外の審査官に再調せしめて、其中でも好いもの三十人位を後宮に採用することゝして、更に之を貴族の夫人にあづけ、睡眠中に鼾をかくやうなことはないか、十分禮儀作法が仕込んであるかなどをしらべさせる。かうして及第したものは更に五人づゝに分つて、其組々は三日三夜かはる〴〵彼の座席に侍し、殘りの者は次室で命を待つて居る

のである。又この選に洩れた者は或は料理などの方に使ふか、或は非常な持參金附で人にくれることもある。こんな風であるから、國人は皇帝の氣に入るやうな娘を持つを非常な榮譽と思つて居る。從つて又折角やつても落選した場合には、詮方がない、星のまはり合せが惡いのだとあきらめて居る。

八　忽必烈（二）

忽必烈は年々十二、一、二の三ケ月間は大抵カンバル（燕京）に滯在して居る。こゝは北支那の東北境に位し、その南方には宏壯な宮殿がある。その宮殿は四方共に各八哩づゝの城壁があり、之を深い濠でめぐらし、門は四方共にその中央の所にある。そして其門内には周囲一哩位の空地があつて、こゝに兵士が屯して居る。さて又この城壁の中には、更に各方六哩の四角な庭があつて、南に三個、北に三個の入口がある。但しその中央のは一番大きく、皇帝通過の際の

外は決してあけない。

云ふまでもなくこの城壁の中には武器庫あり、食料庫あり、又空地には綠色濃き芝生があつて、鹿などが遊んで居る。帝の御座所は特に又空前の大建築で、兩端は南北の壁まで屆き、その大廣間には龍、禽獸、兵士、戰爭などの彫刻があり、屋根は只黃金と繪畫とである。

韃靼の天長節——忽必韃の誕生日は九月の二十八日である。二月朔日（此日がこゝの元日である）を除いては此日が最も嚴肅な日とせられて居る。即ちこの日忽必烈は金襴の衣粧美々しく着飾り、二千許りの貴族軍人も同じく金色の粧をつける。すべて是等の衣粧は一年十三ヶ月（月の盈虛による）に割當てた十三回の祭日以外には用ゐないので、此時には丸で皆王樣のやうである。又この誕生日には帝に屬するものは王も王子も貴族もすべて之に獻上物をするといふのが韃靼一般の風習である。

又この國の元日となつて居る二月朔日にも嚴な式を行ひ、男女共に幸運のしるしといふので、白い衣粧をつけたがる。そして帝に對しても白馬、白布いろ〳〵白いものを獻上し、民間においても同樣の贈答をする。この日は朝から國中の官吏はすべて宮中の大廣間に集合し、式を行ふ。先づ大僧正とも云ふべきものが祈りをあげて、それがすむと祭壇の前に進んで、香を燒き、衆に代つて恭しく帝の名牌と祭壇とを薰ずるのである。これが終ると前記の贈物があり、次いで宴會がある。そして最後によく馴らした獅子を連出すが、丁度小犬のやうに極おとなしく帝の足下にうづくまつてそばえなどする。

三月になると忽必烈はカンバル市を去り、約一萬の鷹匠を引連れて二日路ばかり東北の海の方へと獵に出かける。併し彼は痛風なので、常に二頭の象に引かせた木造の櫓の中に座を占め、その中にも鷹十二羽と之に伴ふ十二人の家來が居る。其他近傍には護衛の爲に貴族や兵士が幾人も騎馬で從ひ、雉子とか鶴

とか何かの鳥が空を翔れば、早速その由が彼の近くに侍せる鷹匠に告げるのである。すると是は又彼に傳へる。そこで櫓の蓋をとれば忽ち鷹や隼が飛出る。彼は床中より其樣を眺めるのである。此外一萬人の者がそれ〴〵の役目を勤める。鷹には一々足の所に銀札が附けてあるから、見失つても又返つて來る。それから野には控所として一萬張許りの天幕がある。そしてこゝには忽必烈はじめ、その一族、乃至鷹匠に至るまでの席が用意してある。一寸遠方から望む時には宛然一個の大市街である。

カンバルより近隣諸州へ通ずる公道は幾條もある。且その公道には各二十五哩又は三十哩毎に宿驛の設があつて、旅館は萬事行屆いて居る。需要品の如きも近隣の都市より取寄せ、馬匹も四百頭位はあるから、使者など馬の疲れた時は新しいのと乘換へてゆくのである。山間僻陬の地で、未だ村落のない處には、帝は一地方に一萬許りの民を送つてこゝに住はせ、耕耘に從事せしめて自ら宿

驛をなさしめて居る。既にかう云ふ風に備へてあるから使者の報告なども直に朝廷に達するのである。

又湖川に沿うた都市では使者の爲に渡舟の設けがある。其他沙漠の近傍ではそこを通過する者の爲馬や食料の準備がある。

使者が新しい馬に乘換へるには角笛を吹く。そして頭も腹もグル〳〵と布で卷いて、馬の脚の續く限りに一所懸命で走りつゞける。又宿驛々々の間には三四哩づゝ距離をおいて二三軒の一部落がある。こゝには徒歩の飛脚が居るので、用事が起れば、何日でも飛出して次の飛脚の所に屆ける。それは又次に傳へる。これらは皆よく鳴る鈴をつるしておいて、注意するのである。

忽必烈は毎年諸州へ使をやつて、風雨蟲害等を調べ、もし凶作の土地があれば、其年の年貢は免じ、却つて此方から食料並びに種子用として、穀物を下賜するのである。即ち政府では豐年の時、澤山買込んでおいて、凶作の際、その

方へ供給してやる。而もその價は僅に市價の四分の一にすぎないのである。

又カンバルの貧民に對しては特殊の保護を與へて居る。もし或名家が不幸のために倒産して生計の道を失するやうな場合があると、帝はかゝる家族に對して一ヶ年間の費用を給する。翌年度もその給與券を持つて役所に出頭すれば、同じく一ヶ年分が貰へるのである。

韃靼人は年を十二に區分して、第一は獅子、第二は牛、第三は龍、第四は犬といふやうに十二ヶ年にそれ〴〵意味をつけて居る。で、もし何日生れたかと聞かれると、例へば何の歳の何月何日の何の刻になど〻答へる。このことは子供の親がくはしく帳面にひかへておくので、其十二ヶ年がすめば、又同樣のことを反覆する。

彼等の宗教については、偶像信者なることは既に云つたが、然らば其神はと云ふと、室の壁の上の方に札をはつて、之に神の名を書き、日々燒香して拜む

のである。この神の外、又地上にはナチゲイと云ふ像がある。彼等は靈魂の不滅を信じ、死ねば前世の因によつて、善惡何れか又他人の身體に入るのだと思つて居る。例へば貧乏人が紳士になり、かくて神になるまで、皇子、皇帝といふ風に出世してゆく。之に反して惡くなると、更に貧乏となり、犬となりだん〴〵下つて、遂に最下等のものまでなり下ると云ふやうなことである。

彼等は話が上手で、挨拶一つするにしても、いかにも快活らしく、いかにも眞面目らしくする。又親には非常に孝行で、もし誰か親に對して不孝なものでもあれば、之を罰する爲に公開裁判がある。又囚人は三年の後、放免するが、頰に印(しるし)をして犯罪者たることを明かにする。

貴族でも人民でも帝の所へゆく場合には、先づそこから半哩以内になると、靜粛にして音を立てず、高聲で話もしない。又貴族等は常に小さな痰壺を携帶して、吐けば早速蓋をする。何人も大廣間では痰を吐くことが出來ないのであ

る。又大廣間に入る場合には白革の長靴とはきかへて、前のは下部に與へ、毛氈を汚さないやうにする。

九、西藏地方

西藏（チベット）地方はかつて蒙哥（マンゲ）即ち元の憲宗に蹂躙せられて今猶その荒涼たる當時の面影を留めて居る。且つ其荒野は人煙絶えて、野獸ひとり勢力を肆にし居る爲に、旅客は常に之が備をせねばならぬ。

又この地方には、偶像崇拜の餘弊として、一種の惡風が流行して居る。それは即ち何人も無垢の處女は娶らないと云ふ風習で、他國から來た旅人共が此地を過ぎて天幕を張ると、年頃の娘を持つた母親達は其々その娘を連れて、旅人の所へ來る。そして何卒（どうか）御滯在中はよろしくと娘をたのむ。そこで旅人は其中でも一番美しいのを選んで採るから、之に洩れた連中は又すと〳〵と歸るので

ある。所が其旅人がいざ立たうと云ふ場合には、女を連れ出すことは出來ない。忠實に元の親に返すのである。娘は又その一時の夫から何か一寸した記念品を貰つておく。そして後に正式に結婚する場合には、之を其身分の證明として示すので、其記念品を澤山持つて居れば居るほど上等で、從つて玉の輿にも乘り易いと云ふ譯である。又女の正裝する場合には、此等戀の記念（かたみ）を頸にかけて飾とするので、其數が多ければ多いほど、人の尊敬もあついのである。併し一旦嫁して人の妻となれば、あだし男には口もきかない。彼等は偶像の崇拜者で、性質殘忍、强盜、竊盜の如きも別に罪惡とは思つて居ない。言語は固有の言語があるが、錢と云ふものはなく、元帝國の紙幣さへ持つて居ない。そして其代りに珊瑚を使つて居る。

西藏の次にカインヅ州あり、こゝにも偶像崇拜の餘弊として前記のやうな旅客待遇の奇習が存して居る。彼等は鹽を一時間ばかりも大釜で煮て、凝結する

と、之を可なりの塊にして、固まればその上に玉の印を捺し、之を携へて、市から離れた商人の少い國の、而も麝香や黃金の澤山ある處へ行つて大儲けをする、卽ちこゝでは肉の調理に用ゐる爲に、鹽と黃金とを換へるのである。

この州を辭して、十五日行程、やがて多くの都市村落のある所に來る。ここにも前記の陋習は行はれて居る。カインツと次のカラヤン州との間に一大河がある。ブリアス河と云ひ、多量の砂金が出る(金沙江)。この州の首府ジャシを距ること十日行程、カラザン州と云ふがある。こゝにも川には砂金を產し、山よりも同じく黃金を出す。此國には實に大きな蛇が居る。大きなものに至つては其長さ十步に亘り、胴のまはり九尺といふ大したもので、其頭の近くには小さな二本の脚があつて、獅子のやうな爪が三つついて居る。又目の玉はパンの塊よりも大きく、ギラ〳〵と光つて居る。頭や口の大きいことは云ふまでもなく、齒も大きな鋭利なもので、よく人を呑む。されば人でも動物でも、とても

ビクともせずには見て居られない。猶この外にも、少し小さな五步乃至八步位の大きさのがある。その捕方はかうである——是等の大蛇は晝間は炎熱のため、窟內にひそんで居るが、日が暮れると獲物をあさりに出て、獅子でも狼でも容捨なく食つてしまふ。そして水を飲みにゆくが、體の重みのため、砂の上には材木を引ずつたやうな痕がつく。そこで獵師はいつも通る砂の下に、大きな鐵の釘を結びつけて置くと、大蛇は之に傷いて死ぬのである。所が鳥は早速、蛇の運命を宣告するので、獵師は卽ちこの聲に誘ひ出されて、その場にかけつけ、その皮をはぎ、膽を取出す。この膽は種々の藥に使はれるので、就中狂犬に嚙まれた時の妙藥である。卽ち之を少し許り酒に混じて飲ませるのである。又婦人には、產の時に、其他いろ〳〵の病氣に特效がある。肉も柔くて高く賣れる。

彼等の中に惡い奴等は始終毒を携へて居り、萬一捕はれるやうな場合がある

と、早速之をのんで自殺し、身の苦しみを免れると云ふ。所が又玉の方でも、之に對して常に犬の糞を用意して居る。即ち之をのますと、毒は直又はいてしまふからである。元帝がまだこゝを平定しなかつた時分には、樣子の好い才物らしい旅客が宿ると、夜中ひそかに之を殺すのが常であつた。これはつまり其才能が其後永く家中に留るといふ迷信に基くもので、かうして殺された者は決して少くない。

次に五日行程にしてカルダン〳〵州。こゝも以上の諸州と同じく帝の領分である。住民は錢の代りに磁器を用ゐ、又金片の重みをはかつても使つて居る。畢竟この國の近邊には銀鑛といふものがなく、銀五オンスに對して金一オンスを出すと云ふ風だから、この交換で大利が得られる。又かく金の豐かな爲に男女共に、その齒を薄い金板で蓋うて居るが、中々手際よくやつて居るので、丁度齒が金の中にあるやうである。其他男は脚や腕を針で刺して、其中に墨を入

れて、しるしをして居る。そして是が彼等の間では剛勇なしるしと思はれて居るのである。

この州では各家族其中の最年長者を尊敬する外別に偶像といふものはない。そして此事について彼等はかう云つて居る。自分をはじめ家族の者は皆この人のお蔭によつて出來たものだと。彼等には文字といふものがない。其契約は木の割符を以てするので、其半分を一方が持ち、他の半分を他の一方が持ち、かうして後に金が拂はれゝば、その割符を返すのである。

この近邊では醫師といふものがない。もし病氣にかゝれば、魔術師或は偶像教の僧侶をまねいて、病人は先づ之にその病狀を告げる。すると魔術師等は踊つたり樂器を奏したりして、大きな聲でどなりつゝ祈るのである。所がやがて惡魔は其等の中の一人にのりうつる。と、其男は無暗と踊り上つたり、はね廻つたりする。かうなれば踊は止めて、惡魔ののりうつつた男とはかり、何故

その病氣が起つたか、又どうしたら快復するかと問く。惡魔は此男の口を借りて、しか〳〵の事をしたから、或は某々の神に對して罪を犯したからだとか何とか返答する。そこで魔術師等は、若しこれが全快すれば、其骨肉の者を奉るからと云つて、神に御赦しを願ふのである。併し惡魔――つまり其乘りうつつた僧侶が此病氣はとても見込がないと思へば、是は非常に神の怒りに觸れて居るから、どんな犧牲を奉つても、とても駄目だと宣告する。又もし都合よく治ると思へば、頭の黑い牝羊を澤山供へ、澤山の魔術師共を招待して、さて愈々神樣の御怒りが解けたといふと、親戚共は直その命に從つて、或は屠つた牝羊の生血を振りまき、或は大きな火をともし、伽羅の香で家中をくゆらし、或は香料入の肉汁を振りまく。さて遂に是等のことが終れば、彼等は再び起つて、神の僞に舞ふのであるが、是は大に病人の爲になることゝ思つて居る。やがてその騷ぎがすむと、魔の乘りうつつた男について、神はもう御機嫌が直つたか

ときく。もし未だだと云へば、又外の祈をするし、もしもう御滿足だと云へば、一同は其お供への肉を食つたり、酒をのんだりして、金を貰つて歸るのである。

紀元一二七二年、忽必烈はボシアム、グラザン兩國征伐のため、戰には經驗多き一人のネストリアンを將として、一萬二千の兵を送つた。所がメーン、ベンガラの兩王はこの報の達すると直、步騎合せて約六萬の兵を募り、之に櫓を負はせた千頭の象を加へた。但しこの櫓には各十二人乃至十六人の兵士が乘つて居るのである。

是に於てメーン王は此大軍を引連れて、韃靼軍の陣地、ボシアム市へと急ぎ進んだ。然るに敵方ではネスターアインと云ふもの、櫓を背負つた象の到底入りえないことを看破し、勇を鼓して進み近づき、或大きな森のほとりに陣を張つた。メーン王側では遙に之を望み見て、今にも突擊しやうとしたが、韃靼軍はこの陣頭にズラリと並んだ象を見て、馬が忽ち恐れをいだき、中々攻擊どころ

ではない。詮方がないから、遂に下馬して馬は木にくゝりつけ、愈々徒歩で象に向つた。そして引つぎ〳〵その象群に矢を放つたので、流石の象も之には堪へかね、傷を負うて脱走し、皆次の森へと逃げて、こゝにその背中の櫓をこはして中の兵士を投げてしまつた。之を目撃した韃靼軍は忽ち又馬に騎つて、破竹の勢で攻めかけたので、見る〳〵中に兩軍の死傷は山を築いた。而もメーン王は遂に敗走し、勝利は結局韃靼軍に帰したのである。そこで彼等は早速その森に行つて兵を俘にし、その兵に手傳はせて、二百頭の象を捕へた。帝の軍には從來象は用ゐなかつたが、此時以來用ゐるやうになつたのである。

一〇　南支那地方

マンジ(南支那)は東方における有名な豐富の地である。紀元一二六九年頃には、宋の天子(度宗)が領して居たが、こゝ百年間、こゝを領した君主中では富

力においても武力においても、其右に出づる者はなかつた。穏和な慈悲深い人だつたから、臣下にも愛敬せられ、從つて國威もあがつて、之に敵するものはなかつた。所がこの堯舜の如き聖王も打ちつゞく太平に、いつか歡樂の俘となつて、日夜、宴樂に耽溺するの人となつた。其後宮は美人一千、彼は是等解語の花を相手にしては春の日を短しとして遊んで居たが、流石裁判には正義を重んじ、平和の保護につとめた爲に、その嚴格公平な刑を恐れて、誰一人としてその近隣を擾亂する者はなかつた。されば民は皆業に安んじ、旅客は日夜心を安んじて全國を通ることが出來たのである。王其人も貧民に對して情深く、生計に苦しむやうな者は一々世話する。又年々捨子を二萬人も集めて養育し、それ〳〵に職を授けて、年頃になれば同じくかうして養育した娘と一所にする。

忽必烈は之とは全然正反對で、只戰鬪攻伐を事として居る。かくて益々已が威名をあげんが爲に步騎合した一大軍を募つて「百眼將軍」と云ふに委れた。こ

こに於てか將軍はその大軍を將ゐてマンジに入り、先づそのコイガンズ市に降をすゝめた。所が意に從はない。併し彼はここには一擊をも加へず、直に去つて第二市にゆき、こゝでも同じ返答なので、更に又第三に、又第四にゆき、かうして同じく降をすゝめたが、返答は皆同じである。遂に第五に來た。返答は素より同じであつたが、こゝに至つて彼は極力之を攻め、城陷りては城内の老若男女一人も殘さず殺してしまつた。所が之を耳にした他の諸市は皆非常に恐れて、直に降を請うたと云ふ話である。

そこで忽必烈は一大軍を派して二軍を合せ、首府クーンサイに迫つた。とはマンジ王の住む所である。所が王は非常に恐れて、一戰にも及ばず、用意の船に財寶を積みのせて、難攻不落の或島に逃れたが、遂にこゝで死んでしまつた。併し女は捕はれても殺される心配がないと云ふので、首府の防禦は后に托した。

王はかつて卜者からこんな事をきいたといふ。即ちその王國は一人で百の眼

を持つた人の外にはいかなる人にも取られないと云ふのである。后はそのことを知つて居たから、敵軍がいかに迫るも、市を失ふことはないと、猶一縷の望をつないで居た。つまり一人で百の眼を持つたやうな者は一人もないと思つて居たからである。所が一旦韃靼軍の大將は「百眼」と云ふ人だと聞いて、非常に怖れた。后もさては是が所謂百眼の人だと思つて、早速市を明渡した。かくて降はきかれ、住民は悉く元帝に歸順した。又其后は元の朝廷に送られて、恰も女王の如く優遇せられた。

マンジには澤山の都邑があるが、其中でシアンフも有數の一市である。この韃靼軍のマンジ征伐の時、こゝも同じく重圍の中に陷つたが、遂によく之に堪へて、陷落には至らなかつた。これ全く此市は四方から湖水で圍まれ、北方の外には之に通ずる道がなく、その糧食は常に船が運んで來たので、流石の忽必烈も之には少からず悩まされた。所が當時、この書の著者の父ニコロと叔父マツ

フイオとは元の朝廷で之を耳にし、先づ帝の所へ行つて、歐洲の法に則り、三百斤の石を射て、人を殺し家をこぼつ機械を作つてはどうかとすゝめた。こゝに於て忽必烈はネストリアン派の耶蘇教徒の大工に命じて、暫時の間にこの機械を三組拵へさせて、實驗した後、船にのせて彼の軍へ送つた。かくて之をシアンフの前に据ゑて、大石をドシ〳〵市中に投ずると、先づ第一に大石は或家の上に落ちて、轟然たる響と共にその大部分を破壞した。城中の者は之を目擊して膽を奪はれ、倉皇爲す所を知らず、直に降つた。これより他の諸城下も皆同樣にして陷つたので、ピニスの兄弟の名は雷の如くに轟き渡つた。

首府クインサイ(京師)は「地の都」の意味なるシングイに對して「天の都」である。蓋し「天の都」とはその市の美觀より起つた名である。話によると此市は周圍一百哩、街路はすべて非常に長く、幅も廣く、到る處に大きな市場がある。又市の一方には水淸き湖水があり、他の一方には洋々たる大河がある。且この

河は市中諸所に出入して汚物をさらへ、之をかの湖水に持込み、それより更に道をつゞけて海に入るのである。この水路は空氣を淸め、又陸には車、水には船といふ風に、貨物を運搬して、大に交通の便を與へて居る。

前記の大通りの市場の外に猶大市場が十ケ所ある。いづれも方形で、各一方が半哩づゝ。そして市の正門とも云ふべき入口から幅四十歩の大道路が一端より他端に向つて走つて居る。

又他の通りには遊廓がある。なほこの規定の場所以外にも市中到る處にあるが、彼等娼婦は皆芳香馥郁たる美衣を着飾り、澤山の婢僕を使つて立派な生活をして居る。

マルコ、ポーロはクインサイの稅關吏からこんな話を聞いたことがある、即ち精密な調べによると、當地における胡椒の消費高は日々四十三ソンマに上ると云ふ。但し一ソンマは二百二十三磅である。これから推せば、肉、酒など各

種飲食品の消費高も分るであらう。

湖水の近傍には華麗な建物、貴族富豪の邸宅、僧侶の澤山居る寺などがある。又その湖水の中央には二つの島があつて、その上には各々無數の室を有する宮殿がある。これは婚禮、其他何かの祭りの會場となる所で、皿、麻布など種々の準備がある。そして時には數室内に一度に百人も集まることさへもある。又湖上には遊樂の爲、小舟の設けがある。彼方には寺院宮殿の燦として照る日に輝く所、鬱蒼たる綠樹の天を摩して聳ゆるものあり、此方には歡樂の子が扁舟に棹して波靜なる湖上に鴛鴦の如く漂うで居る。實際こんな愉快な所は又とあらうか。當地の人は一日を二部に分つて、一半は働き、他の一半は友人や女と共に舟を湖上に浮べて遊ぶか、又は馬車を馳つて市中をのり廻すか、この二つである。

マンジでは歩道の所だけ石敷になつて居るが、こゝでは通りといふ通り、悉

く石敷として、只その側に少しだけ舗石でない所が殘してある。就中その大通りは兩側に各十歩ばかりの間、石を敷きつめ、中央の所は小石を置いて、玉のやうな清水が流れるやうにしかけてある。この大通りには長形の四輪馬車が數限りもなく往來して居る。是には六人分の絹座蒲團が備へてあるが、人は之に乘つて、市中を走り、公園などへ行つて、或は四阿（おうまや）に、或は美しい野に思ふ存分樂しんで、さて日が暮れゝば再び例の馬車に投じて歸るのである。

各町に石造の樓があるが、是は火災の時、神樣を運び込む所である。即ち木造の建物は火災にかゝり易いから、かうしたのである。

忽必烈の命によつて、橋には大抵晝夜共に十人の兵士が――晝五人、夜五人――番して居るが、その番小舍は木造で、その中に大きな鉢が備へてある、云はゞ時計である。即ち各時刻の終り〳〵に水が落ちて、一時三時といふ風に、日の出から始まつて、時刻を示し、日が暮れゝば、更に夜の時刻が始まるので

ある。是等の番人は夜中諸所を歩き廻つて、規定の時刻後に火を持つて居る者やあまりおそく外出して居る者などを拘引し、知事や裁判官の前で理由を一々辯ぜさせる。

働くことの出來ない者が出來ると、之を或病院へ連れ込むのである。この病院は昔からこの市の歳入を以て維持したもので、その數も頗る多い。さてその病人が回復すると、又働くので、もし火事でも起つた場合には、諸所からかけつけて來て、消防や運搬に從事する。災害地の外、夜中は誰も外出が出來ないからである。

マンジ全州の市を數へたら一萬二千もあるが、その住民はすべて勤勉で、よく榮えて居る。是等の諸市は一々その大きさにより、場合に應じて、或は一千、或は一萬、二萬の守備兵が帝より派遣せられて居る。但しこの守備兵は必ずしも韃靼人ばかりではなく、中には北支那(キタイ)人も居る。元來韃靼人は馬術に長じて、

その練習に便利な場所には何處にでも馬を置いて居る。で忽必烈は南支那(マンジ)の武術に通じたものは北支那(キタイ)に送り、キタイからはマンジに送ると云ふ風にして、三年毎に選拔し、四五年間はその故郷から二十日行程位はなれた土地へやつておくのである。かくて期限が滿ちて、新しい隊が代りに來れば、前のは歸る。帝の歳入の大部分は大抵こんなことに消費せられる。かくて若し、何處かの市に亂が起れば、早速その近邊の守備兵を招集して軍を組織し、之を鎭壓にゆく。それでクインサイには常備軍として三萬人、其他最も少い所でも步騎合せて千人位は居る。

マルコ、ポーロがクインサイに滯在せる頃、歳入と戸籍との報告書が帝の所へ來たことがある。この時彼が見たのによると、一個の火を一家族と見て、戸籍に上つて居るものは百六十トーマンといふのであつた。但し一トーマンは十六萬家族を更に一萬倍したものである。而もこの多數の中で、耶蘇教徒の教會

は僅に一個、ネストリアンのが只一個である。家長は皆其入口に男女を論ぜず全家族の名前を書いておかねばならぬ。同様に又馬の數まで書かねばならぬ。そして家族に增減のある場合には、之も一々添加削除するのである。この事は南北兩支那共に行はれて居る。宿屋もその客の名や投宿、出發の時日を帳簿に記入し、日々かゝりの人に差出すのである。

クインサイ及び之に屬する諸市を併すと全マンジの九分の一に當るが、こゝから上る帝の歲入は先づ鹽を第一として、年々黃金八トーマン、但し一トーマンは黃金八萬サッギにあたり、一サッギは一フロリンで、このフロリン全計六百四十萬ヂュカート(ヴェニスのヂュカートは英の十シリング位に當る)である。即ちこの州は海に近いために夏になると、水が凝結して鹽となる湖水が澤山ある。砂糖も亦盛んに出來る。

さてクインサイより東南へ一日行程にしてタピンツ市がある。それより又東

南へ三日行程でウギウ市、更に二日は市府城砦の相連なつた豐饒な土地を通つて行くが、こゝには長さ十五歩、太さ一パーム(三四吋)の太い竹がある。それより更にコンゲイ、ゼンジアン、ギーザ等の諸市を過ぎて、コンチヤ省内に入る。首府はフジウである。之を通つて東南に向ふ六日行程は、山陵溪谷相連なつて、住民も多く、獲物も多い。

こゝの土人は人が病氣以外のことで死ぬと、好んでその肉を食ふ。そして普通の肉類よりはズツと美味いと云つて居る。彼等が戰場に出で立つ時には、耳の邊まで髮を垂れ、金青で顏を彩つて居る。又大將以外は皆徒步で、槍と劍とを携へて進むのである。性質は頗る殘忍で、敵を倒せば、直にその生血を啜り、その肉までも食つてしまふ。

更に六日行程にしてクエリンフといふ都市に達する。この地の女は皆やさしくて美人である。絹や綿の產出多く、住民も大抵富み榮えて居る。こゝには羽

のない、丁度猫のやうな毛をした鷄がある。そして卵も生めば、肉も中々美味いといふ話であるが、實は聞いただけで、實見したことはない。又獅子が澤山居るので、旅行には危險が多いと云ふことである。

次に三日行程、マンゲムといふ市がある。砂糖の產出多く、帝都カンバルにも輸出して居る。併しこゝがまだ忽必烈に屬しなかつた時分には、その精製法を知らなかつたが、幸ひ帝の朝廷にバビロン人が居つて、或木の灰を用ゐて精製する法を敎へてくれた。それまでは只汁を煮て、黑い塊にするだけであつたのである。

次に矢張コンチヤの內でカンジウ市といふのがある。その中央を貫いて幅一哩の大河が流れて居るが、之は此處から東南へ五日行程、ザイツムといふ港に至つて海に入るのである。此ザイツムは有名な良港で、商船は悉くこゝに集まり、それより全印度に散ずるのである。流石は世界の良港だけに、商人の集まる

ることも實に無數である。所が帝は是等に對して、商品百に十の割合で關稅を取るのであるから、帝には非常に有利な場所となる譯である。商人は又船賃にも大した額を支拂ふので、結局品物は半分位しか自分の手には殘らないが、その半分が又非常な利益を與へるのである。

話によると、この邊では一種の土を山の上に投げ上げておく。かうして三四十年の間もそのまゝ手を觸れずに曝しておくと、時が經つて自然に白ける。之を器物に作りあげて、畫をかき、窯に入れて燒くのである。

マルコ、ポーロはこの二地方へは行つたこともあるが、マンジの中、他の九省へは遂に行かなかつた。兎に角是等の所には方言にこそ違ひがあるが、國語としては同樣で、文字も一種である。

一一　日本島

ジパング(日本)はマンジの海岸を距ること東方一千五百哩に位する一大島である。住民は容貌端麗、舉止閑雅、宗教は偶像教で、上には固有の王がある。

彼等は非常に多量の黃金を持つて居る。是れ他國から來る商人少く、且王がその輸出を許さないからである。話によると、王城は丁度當地の教會が鉛板で葺いてあるやうに黃金で葺き、窓も床も皆黃金づくめであるといふ。又こゝには眞珠が多い。

忽必烈はこの風評に垂涎三尺、遂に之を征する爲に二人の貴族を將として一大艦隊を派遣したことがある。その時、一人は阿剌罕といひ、一人は范文虎といふ。共にザイツム、クインサイより出發して、この地に達したが、生憎二人の間に喧嘩が起つた。その爲僅か一市を得たばかりである。而もこゝでは八人を殘す外、捕虜といふ捕虜は悉く殺してしまつた。但しこの八人は其右腕の皮と肉との間に妖術を施した寶石をはさんで居たので、鐵では殺されない。そこ

で遂に木の棒で打ち殺してしまつた。

然るに一日(弘安四年閏七月晦日)北風が烈しく吹いて、碇泊の船は危險至極となつて來た。かくて或は沈み、或は遠く沖に出されて、只僅か許り主だつた連中が彼の二將と共に逃れ歸つた。其離船したものゝ中でも或は板にすがりつき、波間を泳いで、ジパングを距る四哩の一無人島に漂着したものがある。これだけでも三萬人位はあつたが、これには武器も糧食もない。そこでジパング方では暴風の靜まつた後、この機逸すべからずとして、早速一艦隊に一軍の兵を添へてこゝに送つた。

是等の兵は驍々しく上陸して、敗走せる韃靼軍をさがしたが、丁度その島は眞中の所が高くなつて居たので、敵はグル〳〵と逃げ廻つて中々手に入らない。所が又空になつた船は只旗をひるがへしただけで、海邊に捨てゝあつたので、敵はコツソリ之に逃げ込んで、首府へ向つた。所が旗がジパングの旗なので、

誰も怪しむ者なく、難なくこゝに入ることを得た。當時こゝには女の外はあまり人が居なかつたが、彼等はその女の外は皆追拂つて、この女を我物とした。王は之を聞いて大に怒り、早速市を圍ましめて、一人と雖も出入しえないやうにし、かくて六ケ月の間包圍をつゞけた。彼等も之には根まけをして、命だけは許して貰ふと云ふ條件で降參した。是は實に紀元一二六四年の出來事である。

忽必烈はこの二將の敗北を憤つて、一人は首をはね、一人は島流にした。所がこの島は人を縊ひ殺す所である。即ち新に剝いだ水牛の皮を以て、其手を縛つておくと、皮は乾くにつれて收縮し、非常な痛苦を與へる。かうして遂には果敢ない最後をとげるのである。

このジパング島及びその附近の諸島にある偶像は牛、豚、犬などの頭で作つたものである。時には又更に奇怪至極なものがあつて、肩の上に顔があつたり、四本、十本、時には百本も手のあるものがある。併し彼等は是等の偶像に非常

な威力のあるものと信じて居るから、之に對しては一方ならぬ尊敬を拂ひ、且先祖以來代々さう聞傳へて居ると云ふことである。

彼等は捕虜を美食として喜んで食ふ、少くとも食ふといふ評判がある。

このジパング島のある海を支那海といふ。即ちマンジに對する海といふことで、この島の語ではマンジの事を支那といふのである。是は非常に大きな海で、よくこゝに來る水夫や老練な水先案内などの話によると、こゝには七千四百四十個の島があつて、大抵住民があるといふこと、又こゝにある木は悉く芳香を放つもので、諸種の香料に富み、特に伽羅や黑白の胡椒が多い。

この國は印度から遙かに離れて居り、著者マルコ、ポーロも行つた事はなく、又忽必烈にも屬してないから、この地のことは一先づこゝで話を止める。

一二　南洋諸島

支那のザイツムを去つて、一千五百哩の所にヂヤンバー國(占城)がある。廣大富饒の地で、獨立の王をいたゞき、固有の國語を持つて居る。併し偶像信者である。元帝へ貢としては年々象二十頭並に多量の伽羅を奉つて居る。

はじめ忽必烈は此地の豐饒なるを聞いて、紀元一二六八年サガツといふ者を將として征討の軍を送つた。當時その王は既に年老い、到底この强敵には堪へる元氣もなかつたので、遂に貢を奉るといふ條件で媾和をした。前記の貢は即ちこれである。

さて是より南々西へ一千五百哩を航してゆくと、瓜哇島がある。渡航者の話によると、世界一の大きな島で、その周圍は三千哩以上である。獨立の王の下にあるが、長途の航海の危險を恐れて、忽必烈も別に征服しやうとはせぬ。ザイツム、マンジの商人共は多量の黃金、香料などをこの地から輸入して居る。

この爪哇の南々西、六百哩の所に當つてソンドウル、コンドウルといふ二島

がある。次にその南方五十哩にロケイといふ州、更に南方五百哩にペンタンといふ所がある。未開の土地で、森林には良木が鬱蒼として生茂つて居る。こゝへの途中、六十哩の間は、海の深さ僅に四フアツム(一フアツムは六呎)の所がある。こゝから更に三十哩東南の方に進むと、そこには馬萊島の王國がある。それから又東南に一百哩、小瓜哇と云ふ島がある。周圍二千哩ばかりで、島は八王國に分れ、言語は一定して居ない。住民は偶像信者で、香料、黑檀、蘇木など種々の產物が出る。又この地は非常に南方に偏して居るため、こゝでは北極星の影が見えない。マルコ、ポーロはこの八國の中、六國だけはかつて見舞うたことがあつたが、外の二國は見たことがない。第一、フエレツチでは偶像信者が屢々サラセン人と取引した爲、遂に回教に改宗して居る。併し市中においても山間から出て來た者は非常に野蠻で、人肉も食へば、其他何でも彼でも食ふ。そして日々何に限らず朝一番早く目についたものを拜するのである。次

にバスマでは、言語は固有のものがあるが、法律といふものがなく、全く禽獸同様の生活をして居る。こゝには犀といふものがある。象に比べるとズツと小さく、毛は水牛のやうで、脚は象のやう、額の眞中には角が一本生えて居る。併しこの角は何の害も與へない、其代り武器としては長い刺があるから、是で他を傷け、それから之を踏みつけて膝で抑へ、更に舌を以て寸々に引裂くのである。頭は野猪のやうでブラリと下げて居る。好んで泥の中に立つ汚い獸である。又數種の尾長猿や烏のやうに黑い蒼鷹が居る。其他人間の樣な顔の一種の小猿があるが、是は箱に入れて香料をやり、商人の手に賣り渡すと、侏儒(いつすんぼうし)だと云つて世界中に見せまはるのだ。

次はサメーア。マルコ、ポーロは天氣の惡かつた爲、已むなく五ケ月間もこゝに滯在して居たが、その間二千人を連れて、海岸に城を築き、食人種の防禦をしながら、暫時食料のため交易したことがある。次はドラゴヤン。こゝには

一種の陋習があつて、もし人が病氣たかゝると、先つ魔術師に使をやつて、助かるかどうかを尋ねる。惡魔がとても駄目だと云ふと、病人絞殺を業とせる者があるから、親戚はこゝへ使をやり、それから死人を寸々に切刻んで其肉を賞味するのである。而もその骨の髓までも殘らず食つてしまふのである。それはもし其死人の肉が少しでも殘つて居れば、虫がわいて死人には却つて苦しみだと云ふのである。さて其後、骨を山中の洞に藏めて、獸類などのあばかないやうにする。但しこれは他國人の場合も同じことで、矢張りその肉を食ふのである。

次はランブライ。その次はフアンフール。上等の樟腦を產出する。こゝには又パン粉を作る大きな木がある。其製法は先づ三指位の厚さの皮を剝ぎ取ると、中にある髓は即ちその粉である。之を水に浸してよく振り動かすと、輕い屑は浮上つて、よい所だけ底に沈む。そこで水を捨てゝ糊のやうなものを作るので

ある。

ランブライより凡そ百五十哩にして二島がある。一をクーランと云ひ、住民は畜生同様の生活をなし、男女共に裸體のまゝで何もつけない。他の一はアンガマンといふが、是亦前者に劣らぬ野蠻蒙昧の地で、犬のやうな頭や齒をして居るといふことである。

一三　印度地方（一）

こゝより西へ千哩を航し、更に西北に向へば、錫蘭島といふのがある。周回二千四百哩であるが、この邊の水夫の地圖で檢べてみると、昔は三千六百哩もあつたのである。所が北風の爲にその大部分は海になつてしまつたのである。偶像信者で、男女共に只局部を一寸蓋うて居るだけ、全く裸體で歩いて居る。世界一の紅玉、碧玉、黃玉、紫水晶など種々の寶石が出る。話にきくと、こゝ

の王は未曾有の立派な紅玉を持つて居るさうで、其長さは人の手位もあり、大きさも腕位あると云ふ。又その中には一の點さへなく、丸で火のやうに輝いて居るといふことである。勿論金で手に入る品ではない。忽必烈もかつてこゝに使をやつて、一市と交換しやうと申込んだが、王はたとひ全世界の富を以てしても其だけは御免蒙る、先祖傳來の珍寶であるからとても駄目だと答へた。

錫蘭島より六十哩、西方に航してゆくと、廣大なマラバール州がある。但し是は島ではない。大陸に聯絡し、大印度といふ世界一の富裕な地である。こゝには四人の王があつて、その中の主たる者をシングーカンヂと云ふ。この邊では眞珠採集が盛んであるが、是はマラバールと錫蘭島との間に灣があつて、深さ僅かに十一二ファソムに過ぎないので、採集者は囊や網を身體につけて海中に入り、牡蠣を拾つて之に入れる。眞珠はこの貝の中に入つて居るのである。所が時としては大魚が襲來して海人を殺す恐れがあるから、魚を祈り伏せるた

めに、婆羅門の一派に屬する魔術師を雇つておき、其取高の五分は之にやり、一割は王に納める。一體この牡蠣は四月一杯、それから五月の中旬へかけて取れるが、其外は決して取れない。併し又九月になると、三百哩から離れた所で取れる。そしてこの時は十月の中旬まで續くのである。

王も外の者と同樣、裸體であるが、只頸の所には寶石のカラーのやうに貴重な徽章を附け、胸には絹紐をかけて居る。この紐には立派な眞珠が百四個つけてあつて、祈禱の際に使ふのである。但しその祈りとは「パカウカ〳〵〳〵」と之を百四回繰返すので、之を數へるためにこの玉は使ふのである、又腕飾のやうなものを腕に三ヶ所、脚、指、足指等にも同樣のものを附けて居る。

王の後宮は美女一千人である。所が若し自分の氣に入る者があれば、早速之を引入れるので、何日かも自分の兄弟の妾を奪つて、戰爭の起つた事がある。所が母親が若しそんな事をするなら、自分は自殺をするとおびやかしたので、

幸に大事には至らなかつた。王には守護として澤山の騎兵がある。是は常に彼に侍して、死後にはその火葬の際、自分も共に身を火に投じて來世までも臣下として仕へるのである。

罪人の刑にはこんなことが事が行はれる。親戚や友人が罪人を輿にのせて、立派な短刀（ナイフ）十二挺を之に授ける。それから市中へ連出して、此人は神のために身を捧げるのだと大きな聲で呼び廻る。さていよ〳〵執行の場合となると、罪人は先づ二挺の短刀を取り上げて、「神の御爲に身を捧げる云々」と云ひ、眼にぐさと差し立てる。次に腕、腹に二挺、胸に二挺、而して相變らず「神の御爲に身をさゝげる」と絶叫しながら、最後の一刀を心臟に突立てゝ往生する。するとその親戚共は之を火葬に附するのである。又この際には女房も一所に身を火に投じて死なねばならぬ。でなければ罵詈嘲笑の的になるのである。

彼等は偶像を禮拜するが、大抵の者は又牛を崇拜し、世にも神聖なものとし

て、牛肉などは決して食はない。併しゴーイと云ふ連中は自然に死んだ牛ならば食ふ。けれども是も自ら手を下して屠るといふことはなく、家には牛の糞を塗つて居る。

この國では人の坐るには地上に毛氈を敷く。米の外には穀物はない。戰爭などの出來る民ではなく、畜生さへ手を下しては殺しえない。もし何か動物を食ふ場合にはサラセン人か何かに殺させるのである。男女共に一日に二度、朝と夕とに身をすゝぎ、浴後でなければ食事はしない。敢て之を犯すものは外道とせられる。又食事の際とても決して左手は食物に觸れることなく、是は只拭くこと、其他一般に不潔なことに使ふのである。又各人皆自分の壺から飲み、決して他人のものにはさはらない。自分のものでも口には觸れず、支へて居て注ぎ込むのである。それで壺を持たない他國人などにはその手についで飲ませるのである。

罪惡に對する制裁は頗る嚴重で、時としては債權者が債務者の周圍に圈を畫いて、債務を果すか、抵當を差出すまでは、之を出ることが出來ないと云ふことがある。そして若し之を犯せば命を取られるのである。マルコ、ポーロは一度王が商人のために馬上でこんな目にあはされて居るのを見たことがある。これは王が此商人から金を借りて返さなかつたのによるのであるが、流石の王も義務を果すまでは其圈を出やうともせず、人民も王が正義を重んずるのを見て大に稱贊したといふ話である。

飲酒については實に小心翼々で、もし酒にでも舌をぬらすと、もう紳士の價値はなくなる。證人に立つことも許されなければ、命しらずだと云ふので船にものせない。

住民は色が黑いが、是は生得ではない。美しくする爲に無暗に油を塗るからである。彼等は惡魔は白で塗り、神は黑で塗るのである。

一四　印度地方(二)

マラバールの北方五百哩にムルフイリがある。住民は偶像信者。この國の山には金剛石を産出するが、之を取るには大雨の後を選ぶのである。

聖トマスを葬つた土地から西へ進むと、ラルと云ふ所がある。世界で最も正直な商人として知られた婆羅門宗徒は即ちこゝから出たもので、どんなことがあつても虚言はつかない。一旦管理をたのまれたものは忠實に保管する。又仲買人としては商業界に大に活動して居る。彼等の特徴は木綿を肩からかけ、胸の所で十文字を作つて、腕の下で結んで居ることである。風習は一夫一婦に限つて居る。皆立派な古星者で、よく節制を守つて長壽を保ち物を買ふ場合には、日に照らされた自分の影を見て、占ふのである。

彼等の中にタングイとよぶ一種の信者がある。常に裸體で行き、嚴肅な生活

を營み、牛を崇拜して居る。そして小さい牛の像を前額につけ、又牛骨から膏藥を作つて、勿體らしく全身にぬりつけて居る。生きたものは殺しもせねば食ひもせず、たとひ草でも枯れない内は根こぎにしない。一體何物でも皆それぞれ精神を持つて居ると思つて居るのである。又食事には決して皿といふものを使はず、すべて極樂林檎の葉に盛つて出す。寢床は砂の中であるから、起きると、虫を拂ひ落す。

前に錫蘭島の所で一高山のことを話すのを忘れて居た。それは非常な嶮阻な山で、鐵鎖によらなければ容易に登れない位である。サラセン人の話によると、その頂上にはアダムの墓があるといふ。又偶像信者の話によると、偶像宗の開祖、ソゴマン・バルカンの墓だと云ふ。このソゴマンといふ人は元、此島の王子であつたが、浮世を捨てゝ此山頂に孤獨の生を送つて、遂にいかなる快樂をも退け、いかなる誘惑にも打勝つて、こゝに留まつたといふことである。其後彼

の死後、父王がその像を黄金で作つて、之に衣服を飾り、全島の人民をして拜せしめた。これ偶像敎の起原であるといふことである。それで此土地へは遠い處から巡禮が來る。そしてこゝには彼のソゴマンの前齒や鉢が記念として保存してある。所がサラセン人が之をアダムのだと主張したので、紀元一二八一年怨必烈は使者を遣はし、王の許可をえて、齒を二枚と鉢一個とを持歸らせたことがある。(釋迦の誤聞)

ケスマコーランといふ國を離れて約四百哩の所に二島がある。そしてその一つには男が住み、他の方には女が住んで居るのである。是等の男は三、四、五の三ヶ月間、その女人島に來て滯在する。かうして子が生れると、その子は十二歳まで女が養ひ、其からは父の手許へやる。こんな奇習も風土の關係上已むを得ぬことゝ見える。

それから遙か南へゆくと、マダガスカルといふ島がある。世界の最大島で又

最も豐饒な所である。周圍三千哩、住民はサラセン人で、四人の老人が支配して居る。人は商業に從事し、象牙を澤山貯つて居る。この邊は潮流の勢が非常にはげしい。

ゼンジバールも非常に長いといふことである。住民は男女共に醜い。此邊の水夫や熟練な水先案内の中で、印度洋を巡つた者の話や、書物などによると、この印度洋には住民あるもの、荒廢せるもの、合して一萬二千七百の島嶼があるといふことである。又マラバールよりケスマコーランに亘る大印度には十三個の王國がある。

小印度は占城からムルフイリに至る間で、その中には八王國と多數の島嶼とがある。第二印度即ち中印度はアバッシアと云ひ、その王は耶蘇敎徒である。併しその下に屬して居る六王中の三王は耶蘇敎徒、他の三王は回敎徒である。猶こゝには猶太人も居る。

かの聖トマスは先づヌビアを敎化し、進んでアバッシアに渉り、其より更にマラバールにわたつた。このマラバール人は元來勇敢な兵士で、常にアデンのソルダン、ヌビア人等に抵抗して居る。かつて紀元一二八八年にはアビシニア王がエルサレムを訪はんとしたことがある。然るに途中でサラセン人に引留められて、已むをえず其代理として僧正をやり、信仰の意を表せしめた。所がこの僧正もアデンのソルダンに捕へられた。そこで王は兵を募つて、他の二人の回教の王と一所にかのソルダンを打破つて、遂に都アデンを打滅した。

沿海地方の話は既に以上の如くであるから、これよりは更に北方の事を話さう。さてこの北方には韃靼人が澤山住まつて居る。王はカイヅと云つて成吉思汗の血統である。但し誰にも屬して居ない。土人は祖先以來の習慣を墨守し、今以て市府城砦を構へず、王と一所に山野森林に住み、かうして眞の韃靼人として重きを爲して居るのである。彼等には全く穀物といふものがない。只肉や

乳を常食として、平和な生活をつゞけて居る。牛馬羊等其他種々の畜類多きは云ふまでもなく、身の丈二十フアツムの白熊や、非常に大きな黑狐、野生の驢馬など隨分奇體なものがある。又ロンドと云つて、黑貂のやうな色の毛皮を持つた小獸もある。

こゝには又一年中、數ケ月を除いては絕えず凍つた大きな湖水があるが、夏の間は泥濘のため通れないので、皮買商人は十四日もかゝつて沙漠を通る。そしてその間は日に木造の小舍を作つて、土人と交易するのである。冬季には橇を使ふが、是は車はなく底は平で、頂上即ち端の所は半圓になつて高まつて居る。之を犬のやうな大きな獸が二匹で引いて氷上を走るのである。

これら韃靼地方の端は北極にとゞいた國である。こゝを薄暮國と稱する所以は、冬季の大部分は日光を見ず、空氣が濃厚で、恰も我國の曉のやう薄暗いからである。土人は色青白く、よく肥太つて、背は低く、上には頂くべき王と云

ふものもなく、畜生同樣の生活をして居る。所が鞭組人はこの薄暗い間に忍び込んで、屢々彼等の家畜を盗む。而も歸りに道を迷はない用意としては、乳兒を連れた牝馬に乘るのである。かくて追々暗くなりゆく其國の入口で下り、馬は番人にあづけておいて、仕事にかゝる。やがてその仕事がすむと、再び馬に手綱をあてがふ。すると馬は兒の慰しさに急いで元の所に歸る。夏は又畫ばかりである。この長い〳〵夏の間に立派な毛皮が澤山とれる。其中少しは露西亞の方へも輸出するといふ話である。さてこの露西亞といふは、この北方の闇に近い大國である。人民は希臘教徒で、男も女も中々綺麗だ。隣接せる韃靼王に朝貢して居る。東方には皮、蠟多く、銀鑛もある。話をきけば、此國は太洋まで達して、そこには隼の澤山居る島があるといふことである。（完）

大正三年八月廿三日印刷
大正三年八月廿六日發行

（定價金拾錢）
（郵稅金貳錢）

アカギ叢書
第三十四篇
東方見聞錄

著者　佐野保太郎
發行者　赤城正藏　東京市麹町區三番町五〇
印刷者　中田福三郎　東京本郷區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場　東京本郷區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌元　赤城正藏
東京市麹町區三番町五〇
振替口座東京一〇四三二
電話番町二二八〇番

東京　赤城正藏
全國各書林

日本の平明

特色

アカギ叢書

レクラム簡潔

○紳士の標準智識○

1. 古今東西の科學藝文中紳士の標準智識たるべきものを採取し解説せり

2. 從前の刊行物の高價、尨大、難澁なるが爲めに當然辨知し置くべき著述なるにも關せず止むを得ず閑却せられたるもの多きを愛ひ專ら廉價、平易、簡明に解說し刊行せり

3. 内外の傑作の紹介は簡單にコンデンスしたりと雖妙味に到つては毫も減殺する所なし

○世界學術の叢淵○

◀各冊金拾錢也◀

アカギ叢書

毎月數篇逐次刊行

（定價金拾錢 郵稅各貳錢）

○第一編 歐洲文藝 イブセン原作 村上靜人編 ▲人形の家（ノラ）▼

○第二編 哲學叢話 中島文學士編 ▲プラグマチズム▼

○第三編 歐洲文藝 ダヌンチオ原作 日野月文學士編 ▲廢都（劇に現はれたる女性改題）▼

○第四編 社會學叢 ルボン原作 葛西文學士譯 ▲群衆心理（上卷）▼

○第五編 歐洲文藝 ドストイエフスキイ原作 ▲痴人▼

○第六編 歐洲文藝 村上靜人著 ▲ウエデキント と其著作▼

○第七編 哲學叢話 三浦文學士編 ▲ベルグソンの哲學▼

○第八編　歐洲文藝　オスカア・ウワイルド原作　村上靜人譯　サロメ

○第九編　哲學叢話　中島文學士編　オイケンの哲學

○第十編　博物叢話　寺尾理學士編　ダーウインの進化論

○第十一編　日本史談　龍居文學士著　文化文政江戸の世態

○第十二編　歐洲文藝　フライタッハ原作　齋藤文學士編　喜劇新聞記者

○第十三編　歐洲文藝　スチヴンソン原作　齋藤文學士編　壺の鬼

○第十四編　歐洲文藝　トルストイ原作　村上靜人編　復活

○第十五編　歐洲文藝　（絶版發賣禁止）　レディースマン（一名ベラ、ミー）

○第十六編　美術叢話　佐々木文學士著　奈良の美術

○第十七編　歐洲文藝　モーパッサン原作　村上靜人編　女の一生

○第十八編　歐洲文藝　メーテルリンク原作　村上靜人編　モンナ、ヴァンナ

○第十九編　日本史談　龍居文學士著　日本建築史要

○第二十編　社會學叢　ルボン原作　葛西又次郎譯　群衆心理（下卷）

○第廿一編　美術叢話　桑山文學士編　支那の美術

○第廿二編　歐洲文藝　板垣文學士編　ワンダー、ブック

○第廿三編　歐洲文藝　ストリンドベルヒ作　村上靜人編　父

○第廿四編　歐州文藝　沙翁作　村上靜人編　ハムレット

○第廿五編　歐洲文藝　ダヌンチオ作　日野月文學士編　全譯ジヨバンニ（上卷）

○第廿六編　歐洲文藝　全　▲全譯ジヨバンニ（下卷）▼

○第廿七編　歐洲文藝　ダンテ作　村上靜人編　▲神曲▼

○第廿八編　日本史談　龍居文學士著　▲鎌倉の史話▼

○第廿九編　歐州文藝　ヘッベル原作　板垣文學士編　▲ユーデット▼

○第卅編　歐州文藝　ピエトロ・コッサ作　黑田文學士編　▲皇帝ネロ▼

○第卅一編　禮節叢話　獨逸大使館員　前田不二三著　▲歐洲禮節▼

○第卅二編　歐州文藝　イプセン原作　村上靜人編　▲海の夫人▼

○第卅三編　宗教叢話　東北大學講師　佐藤正編　▲オイケンの宗教思想▼

○第卅四編　地理叢話　マルコポーロ原作　佐野文學士編　▲東方見聞錄▼

○第卅五編　歐州文藝　トルストイ原著　葛西文學士編　▲モーパッサン論附ドストイエフスキイ▼

○第卅六編　歐州文藝　ストリンドベルヒ作　葛田青峯編　▲絆▼

○第卅七編　歐州文藝　トルストイ原作　村上靜人編　▲暗の力▼

○第卅八編　歐州文藝　シヨウ原作　島田青峯編　▲武器と人（チヨコレツト兵隊）▼

○第卅九編　歐州文藝　イプセン原作　村上靜人編　▲鴨▼

○第四十編　歷史叢談　文學士　小林愛雄著　▲神話・と・傳說▼

○第四十一編　歐州文學　ズーデルマン作　葛西文學士編　▲マグダ（故鄉）▼

○第四十二編　歐州文藝　ドストイエフスキイ　加藤朝鳥編　▲虐げられし人々（上卷）▼

○第四十三編　歐州文藝　ツルゲニエフ原作　栗原文學士編　▲初戀▼

279
970

○第四十四編 演藝談 文學士 小林愛雄 著 ▲西洋演劇史▼

○第四十五編 歐州文藝 フロオベル原作 畑文學士 編 ▲サラムボー▼

○第四十六編 音樂叢話 小山文學士 著 ▲日本淨瑠璃史▼

○第四十七編 歐州文藝 モーパッサン原作 半田文學士 編 ▲ピエル・と・ジアン▼

○第四十八編 歐州文藝 ダヌンチオ原作 日野月文學士 編 ▲死の勝利▼

○第四十九編 歐州文藝 シエンキウイッチ作 桑山文學士 編 ▲何處へ行く▼

○第五十編 歐州文藝 ドストイエフスキイ 大井文學士 編 ▲罪と罰▼

○第五十一編 歐州文藝 ドオデエ作 黒田文學士 編 ▲サフオ▼

○現出中

頒布部數數十萬を越へたる赤城叢書既刊目錄

終